

c グループとしては遺構外出土土器で第2層ないし第3層より出土した土器群である。

#### IV 各グループの年代決定

a グループは上記の小形完形三点と土器片 152 点が得られているが破片が多く、年代決定を吟味する資料として充分とは言えない。

a 円文、情円文、渦巻文、懸垂文等を単位文として縦位に転回するもの 25 図-9・15・

16・26 図-5, 27 図-1・2・6・12 他で、すべて大木 9b 式に併行する土器群である。その中で第27図-17・21らは同じ土器群の中でも新しい要素をもつ。<sup>⑩</sup>したがってこれらの土壤らは大木 9b 式に構築されたものと考えられる事ができる。ただし後述する土壤内の堆積土は第Ⅲ区第2号土壤№24第51号土壤を除く他はすべて自然堆積土層に分類できるらしく、遺物は土壤構築後（廃絶後）に自然に混入したものと理解される。しかも出土する土器群がほぼ同じ年代に位置することから、おそらく大木 9b～10a 式のある時期に構築され、その後あまり時間の経ね間に大木 9b 式と比較的新しいタイプの 9b 式のものが混入したものとみてよいであろう。

b グループは炉埋設土器 2 点であり、横位に転回する「C」字状文は大木 10a 式の特徴を呈す（手塚 1973）したがって住居の年代も当然、大木 10a 式<sup>⑪</sup>（炉構築直後から住居廃絶後間の年代）に求められる。

c グループは遺構外出土遺物としては計 136 点が得られ第Ⅲ区 128 点で最も多く、№24拡張 7 点、第Ⅱ区 1 点となっている。ほとんどが文様の不明確な破片によるものが多いため年代を決定するには不充分である。第 30 図 21～41 は第Ⅲ区より出土したもので縦長の円文、c 字状文、横位の c 字隆起線による波文等の一部とみられる文様がある。大木 9b～10a 式に併行するものであろう。

#### V 小形土器の年代

すでに土器の項で詳しく述べてあるので文様構成器形等の詳細はひかえる。

a №24 第 49 号土壤上部より出土した無文小形土器で他に年代を断定できる遺物が出土していないので明らかにできない。

b №24 第 42 号より出土したものである。器面全体に施された突刺文、口縁と下脇部に有する波文、内曲する器形等からみて、大木 9b 式でも比較的新しいタイプから大木 10 式の仲間でも最も古いタイプ（大木 10 古式）に併行するものであろう。

c 第Ⅲ区第2号土壤より出土した。縦位に転回する「左右渦巻状文」は大木 9b の特徴を呈す。

エ縦文中期の資料もまた大きいものと言える。遺跡の範囲と他の遺跡との関連性、住居跡、

複式炉の問題、土壙の問題はかならずしも十分な結論を得ていないし、今後も追求する課題の一つとして検討して行きたい。

## 注

- 1 大木10a式の土器片1点と単節斜縫文片2点が得られている。
  - 2 横尾秋子（1973）「米沢市堂森遺跡出土の弥生式土器」工藤定雄教授還暦記念論文集
  - 3 この場合の土器はおもに使用不可能（こわれたもの）のものを使用した可能性もあり、かならずしも大木10a式に構築したものかは難かしい
  - 4 現在調査中であるため詳細は難しいが早期、前期初頭は微傾斜地に構築された例が多くみられ。前期中葉から中期にかけてはいわゆる台地広場を中心に聚落を構成するため、ほとんどの住居跡は傾斜上面に構築される場合が多い。
  - 5 調査中であるので明確にできないが中期と同様の結果をしめすようである。
  - 6 ここで述べたかったのは、縄文中期後葉期住居跡の大半の住居側面に土壙を有する施設が伴うことであり、多くの場合は貯蔵穴と扱われていることである。
  - 7 石組外土器埋設炉の場合は石組の底面には石を伴わない。むしろ形態的には大木9a式以降に発展を示す。石組部（礎石部分）がふくらむダルマ型複式炉に分けられる可能性もある。
  - 8 目黒吉明・丹羽茂編（1970）『本宮町上原遺跡概報』
  - 9 押 橋（1972）「米沢市〈堂森B遺跡〉予備調査報告」『置賜考古』第3号（1975）  
「No.26（堂森B）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋藏文化財調査報告書』第1集 米沢市教育委員会
  - 10 〔亀田英明〕（1974）「米沢平野農業水利事業普門院外3遺跡発掘調査概要」  
米沢教育委員会・東北農政局米沢平野水利事業所
  - 11 亀田英明氏の御教示による。
  - 12 安彦政信・東海林次男（1972）「寒河江市向原遺跡」『寒河江考古』第3号  
寒河江考古友の会
  - 13 山形市教育委員会（1975）「山形市熊ノ前遺跡」－第一次調査報告書－
  - 14 山形県教育委員会（1976）「小林遺跡発掘調査報告書」－山形県埋藏文化財調査報告書
- 第8集－
- 15 宮城県白石市菅生田遺跡より11基の竪穴造構（土壙）が検出され。7基からは埋納した土器と2基の竪穴造構からは少量の骨片も検出されたと言われる。また堆積状態はすべて人工的な堆積層をしめすなど、埋葬施設の可能性を有するとしている。
  - 16 丹羽茂（1971）「東北南部における中期縄文時代・中期後葉土器群研究の現段階」  
『福島考古』第11号
  - 17 注3に同じ

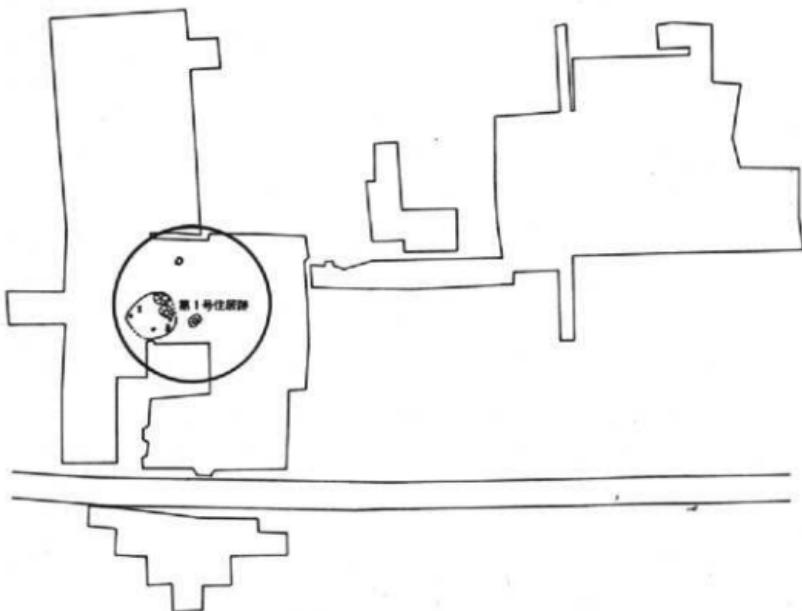
## 参考文献

- 丹羽茂（1971）「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会成立に関する試論」  
『福島大学考古学研究会研究紀要』第1冊
- 越田和夫（1972）「縄文時代中期における住居（炉跡）について」  
『福島大学考古学研究会研究紀要』第2冊
- 宮城県教育委員会（1973）「菅生田遺跡調査概要一般国道4号白石バイパス改築工事関連調査」  
『宮城県文化財報告書』第29集
- 〔佐藤庄一〕（1975）「No.24（堂森B）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋藏文化財調査報告書』第1集 米沢市教育委員会
- 〔加藤稔・佐藤庄一〕（1975）「No.24（清水北C）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋藏文化財調査報告書』第1集 米沢市教育委員会

## 4. 繩文晩期(第39図)

堅穴住居、石組炉(第35号土壙)、土壙と各1基ずつの発見があり、住居跡、石組炉はすでに前述したように昨年(昭和49年)の発掘調査の際に検出されたもので一部精査途上そのため今回の調査に加えられたものである。

ア 繩文晩期の遺跡範囲としては遺構が検出されているNo24拡張部付近とみることができる(第39図参照)。当初、昨年度の調査成果(加藤、佐藤 1975)より、我々は第II区付近の範囲に重点を置いたのだが、残念ながら新たに発見された遺構としては土壙一基がNo24第1号住居跡の北側より確認されたのにとどまる。また遺物に関してもNo24拡張部以外の出土は認められなかった。したがって以上のことにより繩文晩期の遺跡範囲は繩文早期同様に単独で存在する公算が強い。



第39図 繩文晩期遺構配図

イ I 住居跡—県内における住居跡の発見がないだけに注目に値するものとしてよいであろう。長径 3.4 m の円形プランを呈する堅穴住居跡で、今回の調査によって壁は真直ぐ立ち上り、平均 15 cm、柱穴はビットの配列状態より 6 本と推定する。また他のビットに関しては、昨年度(昭和49年)調査の限りでは不明と言うしかない。

II炉跡としても確認できなかったが、昨年度（昭和49年）調査の際に住居内埋土の下層より焼土が細長く住居北側より確認され、上層からは木炭が認められたと言う。地床炉の形態を有するのかも知れないが、住居跡南側に位置する石組炉（第35号土壙）の上部より多量<sup>①</sup>の焼土が認められたこともあり、住居廃絶後に流れ込んだものと推測することも可能であるが、なお不明と言ふしかない。

III石組遺構、すなわち石組炉は今回の調査の結果第3層を掘り込んで構築しているものと判明し、第3層（茶褐色微砂質土層）面にその掘り方が確認できたのである。そうすると石組炉と第35土壙の関連が問題になる。昨年度（昭和49年）の調査によれば石組炉は東西165cm、南北165cmの浅い掘り込み（第35号土壙）底面より確認されたとなっている。今回確認された石組掘り方は東西120cm、南北60cm、深さ11cmと第35号土壙の大きさとは矛盾している。しかも石組炉が構築されている（掘り込まれている）のは第3層であり、土壙は当然それよりも上層（2層か？）であるし、しかも昨年度の調査の際に土壙の上部より多量の焼土とともに粗製の小形壺形土器1点も検出されている。残念ながら土壙内の堆積状況がとらえられていないので土壙と石組炉の相異関係をとらえることは難しい。

N土壙は住居跡の北側1mより発見されたもので前記の第35号土壙に共通する特徴がみられる。①第1層面に完形土器（無文粗製土器）を埋納している。②土壙の埋土に多量の焼土を含む。③住居跡に接しているなどである。また、第43号土壙は全体が焼けた痕跡を呈し、炉穴的な感じである。さらに土壙内の堆積土層は人工的堆積状況をしめす。以上のことより、この種の土壙はなんらかの意図的な背景を有しているものと推測できる。しかも住居跡に接して位置する事などから推測すれば住居跡とは密接な関連をもつ特殊遺構と思われ、土壙のもつ機能、目的その他の推論は類例がないだけに難しい。

ウ土器としてはNo24第43号土壙内出土遺物ならびに第1号石組掘り方内出土遺物である。両者とも合せて72点検出されているがすべて年代決定の吟味な粗製土器であるため、詳しい年代を求める事は困難である。ただし昨年（昭和49年）度の調査の時に住居床面より出土した浅鉢土器は縄文晩期の大洞BC式の特徴を有していることより、ほぼ同じ年代に位置するものと考えることができる。

エなんと言っても縄文晩期の住居跡発見は重要な成果の一つである。今回はNo24遺跡範囲内からの新しい遺構は確認できなかったが、おそらく付近に縄文晩期の集落跡が存在するものと確信している。県内に類似がないだけに早期住居跡ともども保存して行きたいものである。米沢市内ではNo24遺跡の他の遺跡としては梓山寺代遺跡、No.5遺跡、No.30遺跡、付近<sup>④</sup>丹南遺跡（龟田 1976）がある。

## 注

- 1 土壌上部に検出されたもので残念ながら焼土分布範囲はとらえられていない。
- 2 確認されていない。
- 3 どうした訳か昨年の報告では住居内より検出されたとなっている。筆者も当遺跡の発掘調査には後半から参加しているのでよく覚えている。おそらく担当者の記憶違いであろう。
- 4 西川町的場遺跡より、大形住居跡が発見されている。
- 5 昭和45年4月(加藤 稔、佐藤庄一)調査。海野文芳(1970)「米沢市壹代遺跡予備調査概報」『山形大学・周研月報』
- 6 秦 昭繁他(1972)「米沢市八幡原周辺の遺跡」『置賜考古』第3号
- 7 横戸昭二氏の御教示による。

## 参考文献

龜田晃明(1976)「南原丹南遺跡調査略報」『置賜考古』第4号

## 5. 弥生期(第40図)

弥生期の遺構としては昭和45年度調査検出遺構(土壌10基、ピット16基)、昭和49年度調査検出遺構(土壌21基、ピット23基)そして本年度調査検出遺構(土壌7基、ピット59基)を含めた土壌38基、ピット98基の合計136基である。その中で特にピットに関しては確実に弥生期の施設に伴うものかはわからない。なお、その点の吟味も含めて昭和45年度調査遺構、昭和49年度調査遺構、本年度調査遺構をとりまとめ述べたい。

ア 弥生期の遺構範囲としては後述するA~Dグループをつなぐ範囲と思われる。遺物の出土範囲としては№24拡張範囲よりの検出が最も多く、次に第Ⅱ区、第Ⅲと少量ながら認められ、おおよそ№24遺跡全体に分布しているものとみてよいであろう。したがって遺跡範囲は№24拡張部を中心に第Ⅱ区(№19遺跡の一部を含む)、第Ⅲ区全体に広がっているものと思われる。

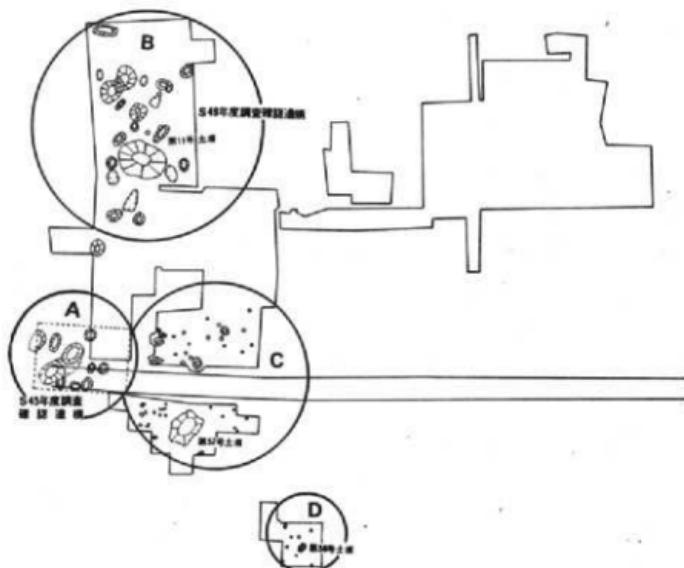
イ 弥生期遺構の分布状況、配置状態、分布範囲等から検討するとつぎのA~Dのグループに分けることができる。

Aグループとしては昭和45年度調査範囲より確認された遺構群で第1号大形土壌を中心として10基の土壌(1号~10号)と26基のピットが検出されている。その中でも中核となるものが第1号土壌と第4号とみられ、規模も他の土壌と比較すれば2m前後と大きく、多量の遺物を包含している。第40図-A

Bグループは昭和49年度に調査された範囲に分布する土壌、ピット群で、長径4.7mの当遺跡最大規模を呈する第11号土壌を中心として土壌16基、ピット23基、合計39基確認されている。遺物としては第11号土壌内より検出されたものがほとんどで他に15号、19号

土壤内より2点。その他はまったく遺物の検出が認められなかった。第10図-B Cグループは今年度調査に確認されたもので第II区第57号土壤を中心に5基の土壤とピット52基が検出されている。遺物はNo.24第55号土壤より認められている。なおB～Fトレンチ拡張部、第II区拡張部ピットはすでに遺構の中で詳しく述べているので参照願いたい。第40図-C

Dグループとしては第58号土壤を中心とするピット群であり、Cグループの範囲内に加えることも可能であるが、土壤自体が他の土壤とくらべて、特殊な構造を呈すことと、土壤内に主要土器が埋納されていることから一応分けた。第40図-D



第40図 弥生期遺構配図

以上、簡単にA～Dの4グループに分けて述べてみた。これらの土壤の中に弥生期以外の遺構も存在する事を考慮しなければならないが、しかしDグループを除くA～Cには共通したいくつかの特徴がみられる。まず第1に遺構群であり、いづれも主要土壤（大形土壤）を中心として分布しており、第2に遺物も圧倒的に主要または、それに同格の土壤からの検出に限られる。第3に主要土壤ならび付随する小土壤群であり、主要土壤（大形土壤）は人工的堆積層、小土壤群は主要土壤と異差なる自然堆積状況をしめす。第4にピット群であり各グループの範囲内に点在する。などである。

出土した土器はほとんどが破片が多く、ここで十分推論する要素を呈していないので省略する。なお土器の考察については『米沢市八幡原埋蔵文化財調査報告書』第1集(加藤 佐藤 1975)を参照願いたい。

### エ各グループの問題

ここで分かるようにA~Cのグループは1~4の特徴では同一機能を有する遺構群の可能性を強くする。このことはすでに昭和45年度調査報告(佐藤 1975), 昭和49年度調査報告(加藤, 佐藤 1975)の中でも指摘されている。それによると土壤を2類に分け、第I類土壤を第1号土壤、第4号土壤、第11号土壤(主要土壤)とし、第II類土壤をいわゆる第I類土壤のまわりに存在する小規模土壤と分類している。そして埋土の状態遺物の出土状況(杉原, 大場 1974)の報告等を考慮し、第II類を一次埋葬のための土壤を第2次埋葬のための集骨墓との見解を示唆している。筆者も基本的には、ほぼ同じであるが、今回確認された第57号土壤には合口壺形土器はもとより、第1号土壤で検出された多量の土器、管玉等の副葬品は一切含まれていない。また第I類に分類した第4号、第11号土壤に関しては同じようなことが言えるであろう。さらに小規模土壤に関しては確実に弥生期に伴うものかも不明であるし、筆者の分類第5表によるとその大半は自然堆積層(機能を失った。または廃絶した後に再堆積したもの)に分類される。第5表、八幡原№24遺跡弥生期土壤分類表を参照。

第12表 八幡原№24 遺跡弥生期土壤分類表

No.	土壤名	長さ (cm)	深さ (cm)	形 状	遺 物	④検討の必要有り	
						A人工的堆積層	B自然堆積層
1	1号土壤	東西 240 南北 190	90	橢円形	完形土器8個(壺形土器6点、蓋形土器2点)土器片約1500点(壺形土器、壺形土器、鉢形土器、蓋形土器)石器(石錐4点、石槍2点、石匕1点、管玉18点)	A	
2	2号土壤	東西 80 南北 47	33	円 形	壺形土器片30点 剥片数点	Bと思われる	●
3	3号土壤	東西 236 南北 100	59	橢円形	土器片4点	Bと思われる	●
4	4号土壤	東西 170 南北 125	34	橢円形	土器片約100点(壺形土器、壺形土器、鉢形土器) 石器(石匕1点、剥片数点)	Aと思われる	●
5	5号土壤	東西 95 南北 116	21	円 形	壺形土器片23点	Bと思われる	●

№	土壤名	長さ (cm)	さ (cm)	形 状	遺 物	層位 A人工的堆積層 B自然堆積層
6	6号土壤	東西 120 南北 70	35	情円形	壺形土器8点 磨製石斧1点 石 1点	Bと思われる
7	7号土壤	東西 75 南北 50	9	情円形	ナシ	1号壙に切られて いる。Bと思われる
8	8号土壤	東西 52 南北 68	26	情円形	ナシ	Bと思われる
9	9号土壤	東西 58 南北 57	32	円 形	ナシシ	Bと思われる
10	10号土壤	東西 80 南北 90	32	円円形	壺形土器数片	Bと思われる
11	11号土壤	東西 417 南北 357	75	情円形 (不整)	土器片約700点 (壺形土器 壺形土器 鉢形石器剥片数点 土器 蓋形土器)	A
12	12号土壤	東西 71 南北 76	20	円 形	ナシ	炭化物を含む Bと思われる
13	13号土壤	東西 70 南北 70	14	円 形	ナシ	炭化物を含む Bと思われる
14	14号土壤	東西 181 南北 104	33	情円形 (不整)	縄文前期初頭土器片 2点	Bと思われる
15	15号土壤	東西 62 南北 198	15	長情円形	壺形土器 2点 鉢形土器 1点	炭化物を含む Bと思われる
16	16号土壤	東西 73 南北 40	15	情円形	ナシ	B
17	18号土壤			円 形	不 明	Bと思われる
18	19号土壤	東西 122 南北 144	47	円 形	土器片 1点	B
19	20号土壤	東西 216 南北 235	42	円 形	ナシ	Bと思われる
20	21号土壤	東西 77 南北 76	15	円 形	ナシ	B
21	22号土壤	東西 160 南北 94	29	情円形 (不整)	ナシ	B
22	23号土壤	東西 100 南北 130	26	情円形	ナシ	B
23	24号土壤	東西 77 南北 49	10	情円形	ナシ	B

No	土壤名	長さ (cm)	深さ (cm)	形 状	遺 物	層位 A 人工的堆積物
24	25号土壤	東西 45 南北 56	222	橢円形	ナシ	炭化物を含む B
25	26号土壤	東西 83 南北 117	24	橢円形	ナシ	B
26	27号土壤	東西 105 南北 140	25	橢円形	ナシ	B
27	28号土壤	東西 145 南北 175	25	橢円形 (不整)	ナシ	B
28	29号土壤				不明	
29	30号土壤	東西 188 南北 180	31	円形 (不整)	ナシ	B
30	31号土壤	東西 154 南北 158	32	円形	ナシ	Bと思われる
31	32号土壤				不明	
32	52号土壤	東西 61 南北 65	14	円形	ナシ	B
33	53号土壤	東西 78 南北 51	17.5	橢円形	ナシ	B
34	54号土壤	東西 60 南北 90	16	橢円形	ナシ	B
35	55号土壤	東西 83 南北 75	15	円形	土器片 7点 フレーク 1点	中央ピットを有する Aと思われる
36	56号土壤	東西 71 南北 70	15	円形	ナシ	57号土壤に切られている B
37	57号土壤	東西 285 南北 229	50	橢円形	土器片 1点 打製石斧 1点	A
38	58号土壤	東西 70 南北 55	15	橢円形	壺形土器 上部半位 (約 40 点)	小ピット 5ヶ所含まれる Aの可能性を有す ②

これによると人工的堆積層(A)をしめすもの1号土壇他4基、自然堆積層Bをしめすもの2号土壇他29基、不明3基がある。なおその中で図は検討の必要を有するものに分類できた。この中で自然堆積層(B)に分類できる土壇群の中で遺物をまったく含まない土壇についてさらに検討を加えると、先の縄文中期の土壇群に類似することが注目される。縄文中期の土壇について判明した事実①～⑩に当てはめると①、③、⑥～⑦、⑨～⑩の9項に当る。だがこれだけで縄文中期の遺構と判断することはむろん危険である。以上のことから考慮すると簡単に主要土壇(大形土壇)と小規模土壇を埋葬施設と位置づけることはかならずしも妥当とは言えないであろう。むしろ第Ⅱ類土壇を第57号土壇、第11号土壇、第Ⅰ類土壇を第1号土壇と考えた場合はどうであろうか。また東日本の影響の中で存在した再葬墓の風習(第1号土壇)とともに縄文文化の伝統を引き継ぐ西日本のいわゆる土壇墓(第4号土壇？、第11号土壇、第57号土壇)とか共存したと考えてはどうであろうか。

なお、十分検討する必要がある。

## 参考文献

- (佐藤庄一)(1975)「No.24(堂森H)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』第1集 米沢市教育委員会  
 (加藤 稔、佐藤庄一)(1975)「No.24(清水北C)遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書』第1集 米沢市教育委員会  
 杉原在介・大塚初重(1974)「千葉県天神前における弥生時代の墓址」

## 6. 平 安 期

平安期の遺構も昨年(昭和49年)の調査で初めて発見されたものである。今回は第Ⅲ区のみに遺構が認められた。

ア遺構の分布状況より第Ⅲ区を中心とした範囲と思われる。

イ確認された遺構は住居跡2棟、土壇20基、横穴1基それに昨年(昭和49年)検出された集石遺構1基が含まれる。この中で特に第Ⅲ区第1号住居跡と土壇群については土壇の分布状況、土壇の堆積状態より考慮すると先の住居との見解よりもむしろ、工房的要素を強くする遺構とみる方が自然と思われる。なお土壇の中には第1号、第13号土壇のように同じ層位に完形土器、炭化物を含むものや、形状が袋状を呈するのもあり、原則的にはさらに細区分できるものとみられる。

ウNo.30、31遺跡と比較検討して行きたい。

エNo.24遺跡での平安期遺構の検出は予想していなかった発見であり、第Ⅲ区第1号住居跡は何らかの工房的要素を強くすることであり、当遺跡の北方向約400mに位置するNo.30、31遺跡との関連性も合わせて今後の課題としたい。

(手塚 孝)

## 第9章 上竹井地区の遺跡群(1)

上竹井集落の東側に位置し、周辺の水田地帯より一段高い面を形成している。付近には天王川が流れ遺跡周辺は湧水地帯である。

以前から地元の研究者によって知られた遺跡で上竹井遺跡と称されている。これまでに発掘や報告等も地元の研究者によって何度か行なわれ、収集された遺物もばく大な量におよぶ(『報告書 第1集』参照)。

調査は2m四方のグリッド方式を用い、計約6,000m<sup>2</sup>を発掘した。調査の結果、100基ちかい住居跡・土壙跡・集石遺構等多数の遺構を検出した。なお、分布調査の際に命名したNo.30遺跡とNo.31遺跡とは連続していることがわかり、遺跡の範囲も相当な面積におよぶものと推定される。

### 第1節 遺構

#### [No.31遺跡]

縄文時代前期の住居跡(第60図版)	1基	第4号住居跡
縄文時代後期の住居跡(第64図版)	1基	第1号住居跡
縄文時代中・後期の大型集石遺構(第61・63図版)	1基	
縄文時代中・後期の石組遺構	1基	
縄文時代中・後期の地床炉	2基	
縄文時代中・後期土壙	3基	
縄文時代中・後期小ピット群	數カ所	
奈良～平安時代の住居跡	2棟(未調査)	第2・3号住居跡
奈良～平安時代の住居跡(第72～76図版)	3棟(調査完了)	第5・6・7号住居跡
奈良～平安時代掘立建築遺構(第69・70図版)	1棟	
奈良～平安時代倉庫跡(第71図版)	1棟	
奈良～平安時代の土壙	2基	
奈良～平安時代の土師窯?	1基	

#### [No.30遺跡]

縄文時代中・後期の大型集石遺構	1基
-----------------	----

縄文時代中・後期の土壙	25基
縄文時代中・後期の埋甕	2基
縄文時代中・後期のピット群	
奈良～平安時代の住居跡（第46・48・51～55図版）	5棟 第1・4・5・6・7号住居跡
奈良～平安時代の土壙（第49図版）	30基
奈良～平安時代の炉跡（第49図版）	2基
奈良～平安時代のピット群（第49図版）	

## 第2節 遺 物

住居跡・土壙等100基にちかい遺構出土の遺物は、膨大な量におよび、整理箱にして、50～60箱以上になる。遺物の大部分が土器片である。縄文時代の遺物としては、土器類（復元可能多数）・土器（土偶・円板状土製品等）・石器（石鎌・石槍・石匙・石斧・石皿・凹石等）がある。奈良～平安時代の遺物としては、土器（須恵器・土師器）をはじめ、土製紡錘車・土製支脚・鉄鎌・鉄釘等が出土し、特に鉄器は数10点出土している。他に大変注目すべき遺物として、竪穴住居跡内から炭化材が多量に出土している。

## 第3節 遺 跡 の 性 格

### (1) 縄 文 時 代

遺構としては、住居跡・土壙・集石遺構等を多数検出した。住居跡として明確なものは、加曾利B-I期1棟のみである。他に検出した土壙や集石遺構は地母神信仰のように祭祀的な様相を強くする。例えば、祭壇的なものであろうか。なお、検討の必要がある。

また、全体の遺構数・遺物量の中心をしめるのが堀之内I式の時期であり、それに該当する住居跡は1棟も発見がなく、周辺地域に大規模な存在が考えられる。

### (2) 奈良～平安時代

遺構として住居跡・倉庫跡・掘立建築遺構等を検出した。住居跡はNo.30～31遺跡あわせて10棟の住居跡がすでに発掘された。主軸4m～5m、ほとんどがカマドをもつ方形の竪穴住居跡で、未調査区域にもまだ相当埋没しているものと思われる。おそらく全体として30軒の集落跡になるであろう。

10出土した遺物は多量にわたり、特にそれらの遺物のなかで紡績に使用された土製紡錘車、

鉄製紡錘車が出土しており、一般的な集落跡なのか、工房跡を含むいわゆる工人集団の集落跡なのか、といったような性格的に興味がもたれる遺跡である。

(追記) №30 遺跡最終精査の結果、新たに掘立建築遺構2棟を明らかにした。また、土壙と称したものうち、奈良～平安期のものの大部分は建築遺構の掘り方である事を確認した。

#### 第4節 ま と め

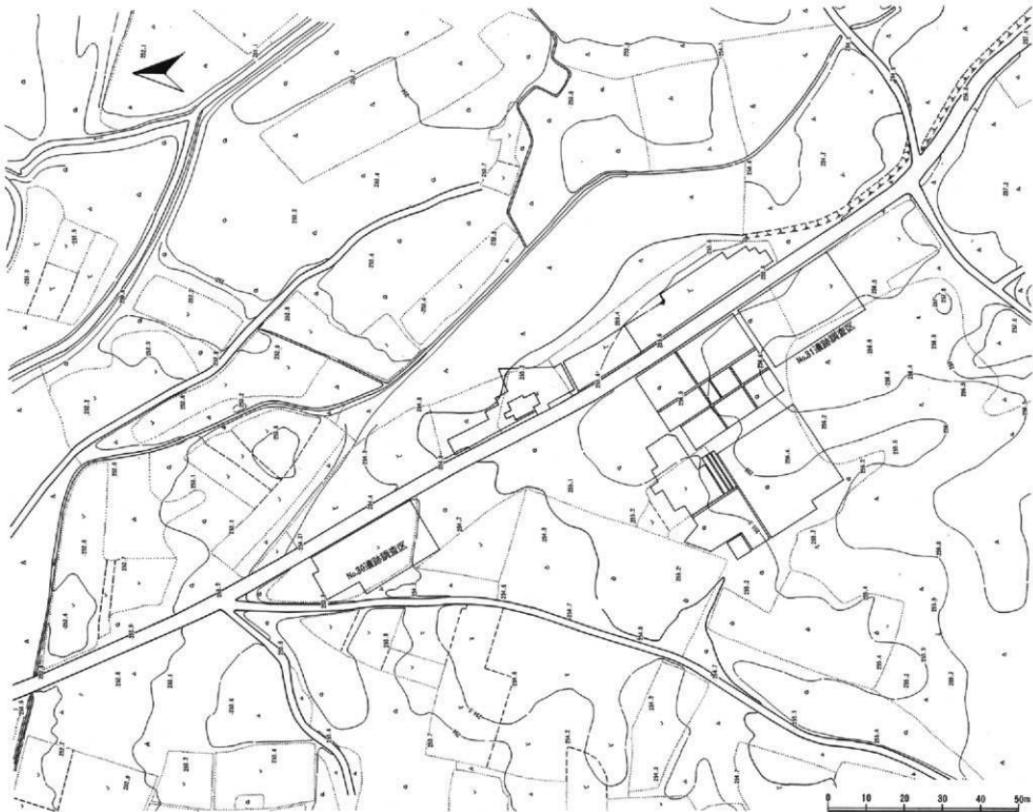
- ① №30・31遺跡では、縄文時代および、奈良～平安時代の住居跡、土壙等多数の遺構を検出し、住居の構造、集落の構成等について重要な資料を提示した。特に、縄文時代後期・掘之内I・II式期を中心とする集石遺構・奈良～平安時代の住居跡群は良好な遺存状態で検出することが出来た。
- ② 各種の遺構から出土した多量の遺物は、当時の生活状況を把握するうえで大変貴重な資料である。
  - イ、縄文時代の集石遺構から出土した土偶・石器類・奈良～平安時代に火災に遭遇したと思われる住居跡より出土した炭化材は重要視すべきものである。
  - ロ、炭化材は特に建築学、植物学の見地から調査研究する事により建築材質、また当時の家屋構造、すなわち柱・棟木・垂木等の部位が判明するであろう。その結果が良好ならば家屋の一部を推定復元する事も可能である。
- ③ 試掘による遺物包含層確認調査、また遺物の散布状況から調査実施地区以外にも遺跡が広く伸びることが予想される。
- ④ 今回の調査により、予想以上の成果を得た。検出した住居跡、集石遺構等、出土した多量の遺物は学術的にも価値が高い。なお、№30.31遺跡の継続調査を次年度に実施する計画になっており、概略のみを明示し、詳細はその結果とあわせて第三集で集成報告する事にしたい。

第1表 出土遺物一覧表 (No.30遺跡)

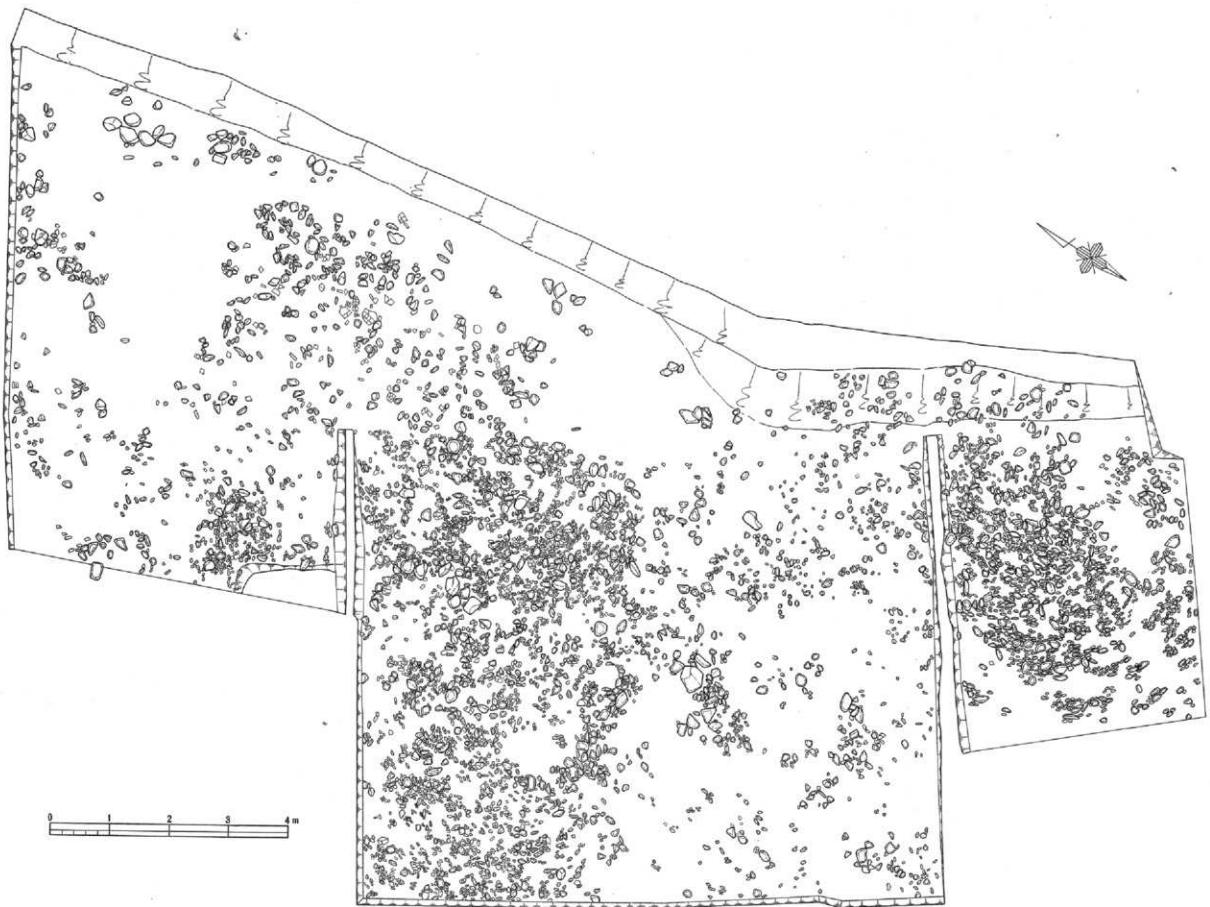
住居跡番号	土器類	土製品	鉄製品	自然遺物
1 H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤燒土器 1点</li> <li>・内黒土師器 1点</li>   <li>大甕 1点</li> <li>小形甕 4点</li> <li>・須恵器 4点</li> <li>大甕 1点</li> </ul>		<p>鉄鑓 1点 纺錘車 1点 釘 1点 鉄器片 1 止め金具 1点</p>	炭化材 多量 屋根材(茅・芦) 木炭 少量 骨片 少量 曲物片 1点
4 H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土師甕断片 1</li> <li>・土師壺 1点</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土製支脚断片 1</li> <li>・土製纺錘車 1点</li> </ul>	鉄製錆 1	木炭 少量 骨片 3点
6 H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・須恵大甕 1点</li> <li>・須恵横瓶 1点</li> <li>・内黒土師器 2点</li> <li>・土師甕断片 1</li> <li>・赤燒土器 1点</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土製纺錘車 1点</li> </ul>	<p>鉄釘 4点 止め金具 1点</p>	無
7 H	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土師甕 1点</li> <li>・高台付壺 1点</li> </ul>		<p>纺錘車 1点 止め金具 1点 不明鉄器 1点</p>	炭化材 少量 焼石 2点 屋根材 (茅?)

第2表 出土遺物一覧表 (No.31遺跡)

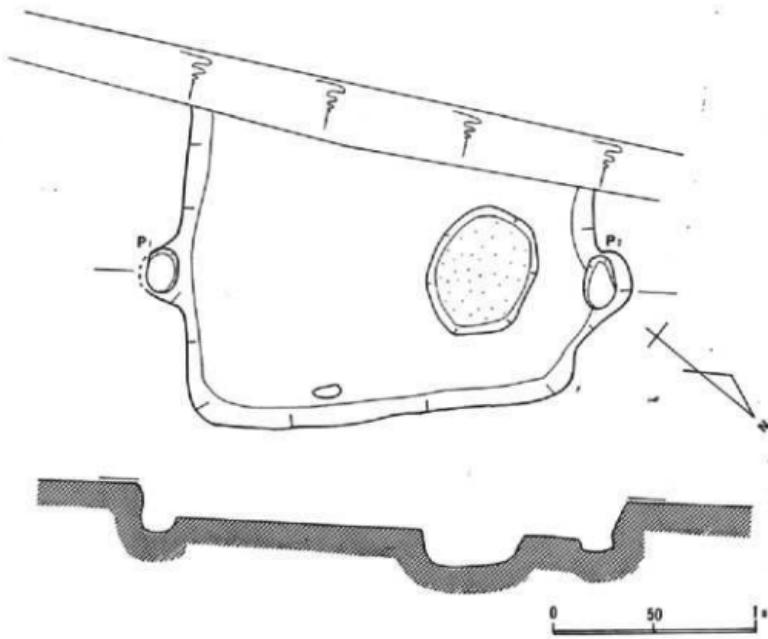
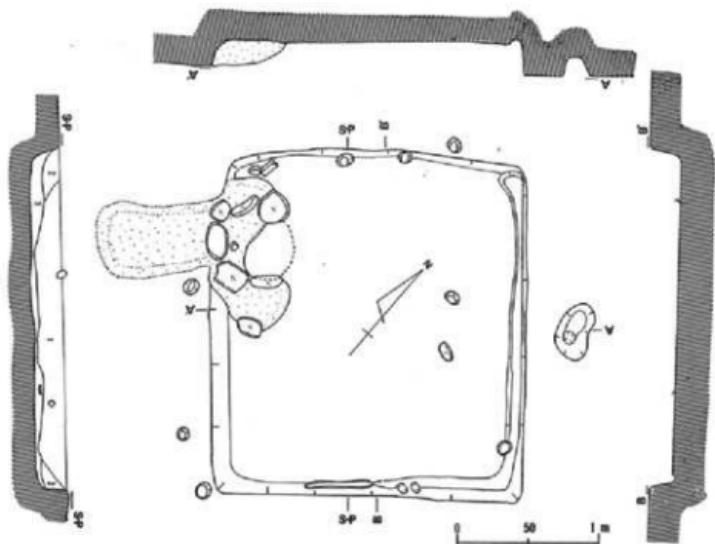
住居跡番号	土器類	土製品	鉄製品	自然遺物
5 H	土師甕断片 1	土鍤 1点	鉄片 1	木炭 少量
6 H	土師甕断片 2		<p>鉄鑓 1点 不明鉄器 1点</p>	木炭 少量
7 H	土師器片 少量			木炭 少量



第1図 八幡原No30・31道路周辺地形図

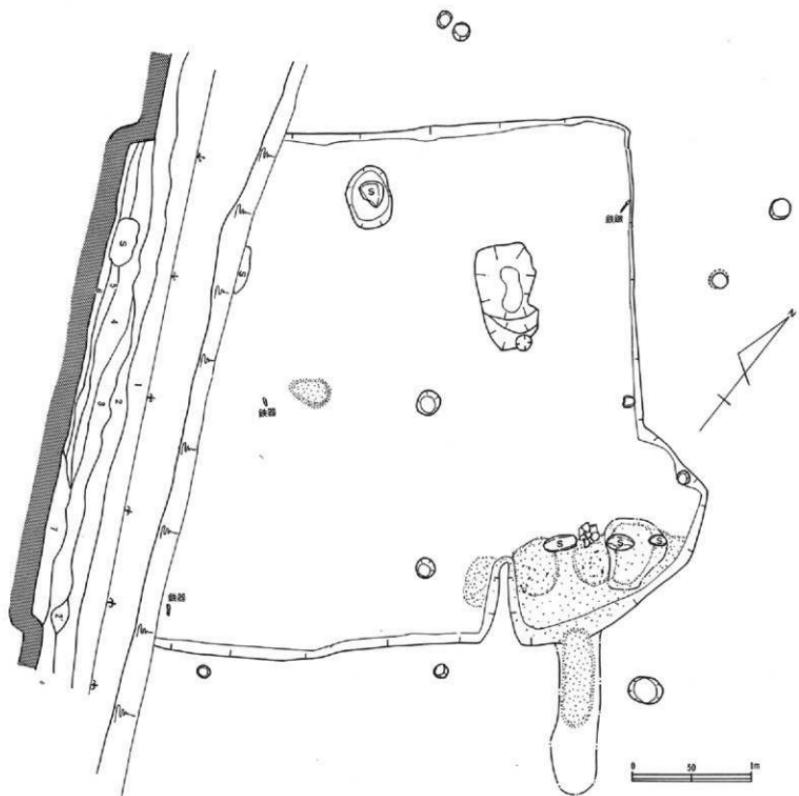


第3図 No.31 遺跡集石遺構実測図

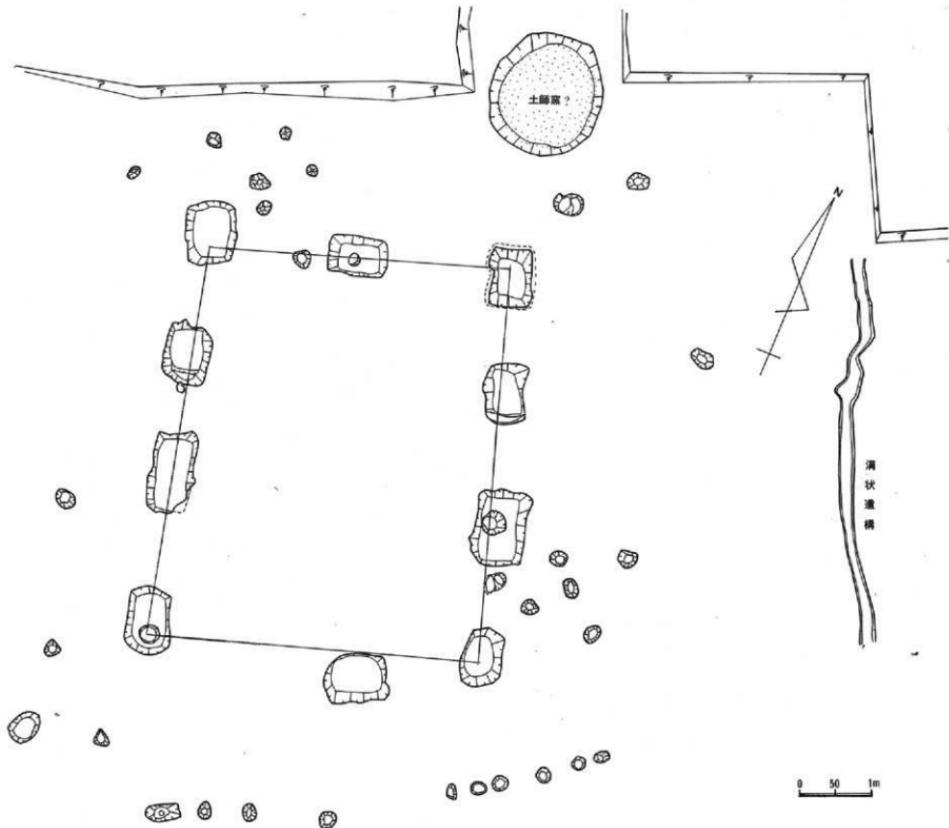


第4図 八幡原No.31遺跡5号住居跡実測図

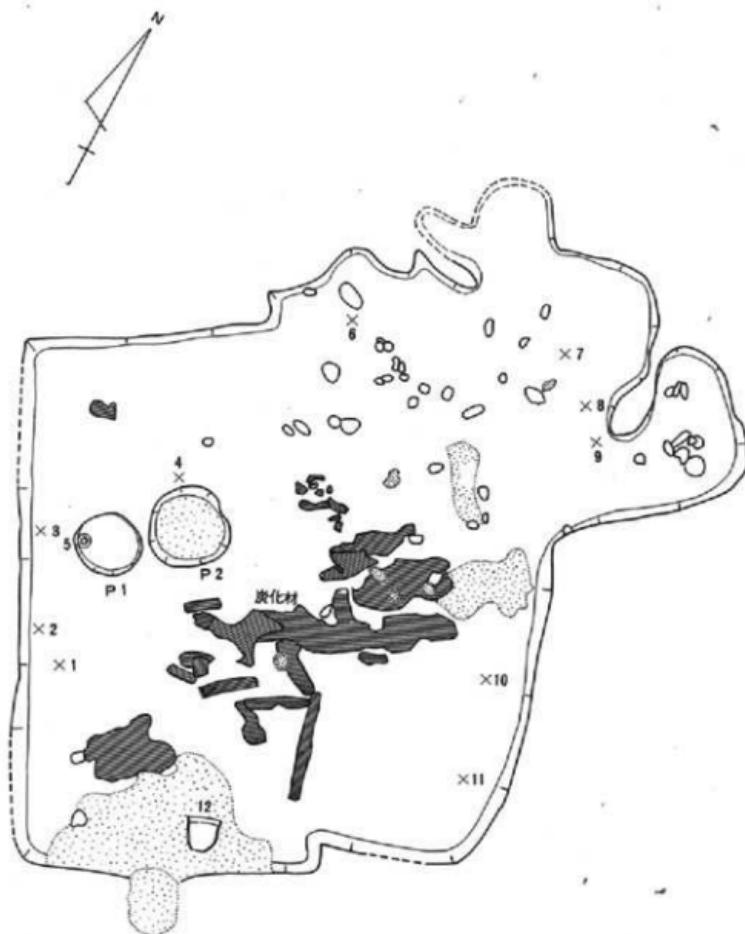
八幡原No.31遺跡7号住居跡実測図



第5図 八幡原No.31遺跡6号住居跡実測図



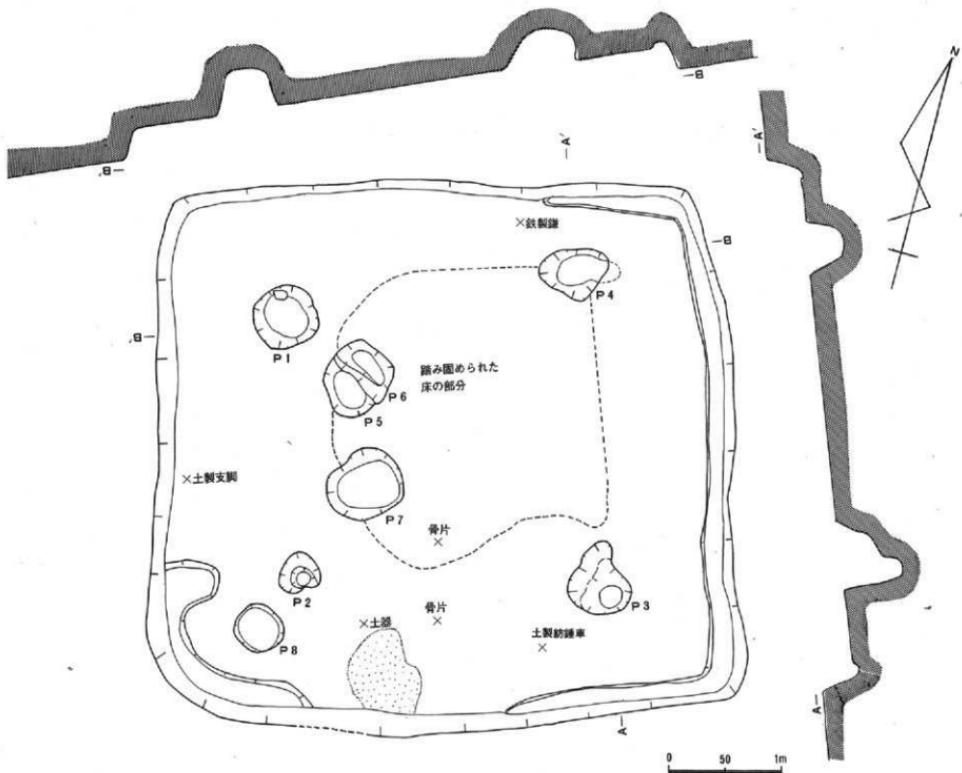
第6図 No.31遺跡掘立建築遺構実測図



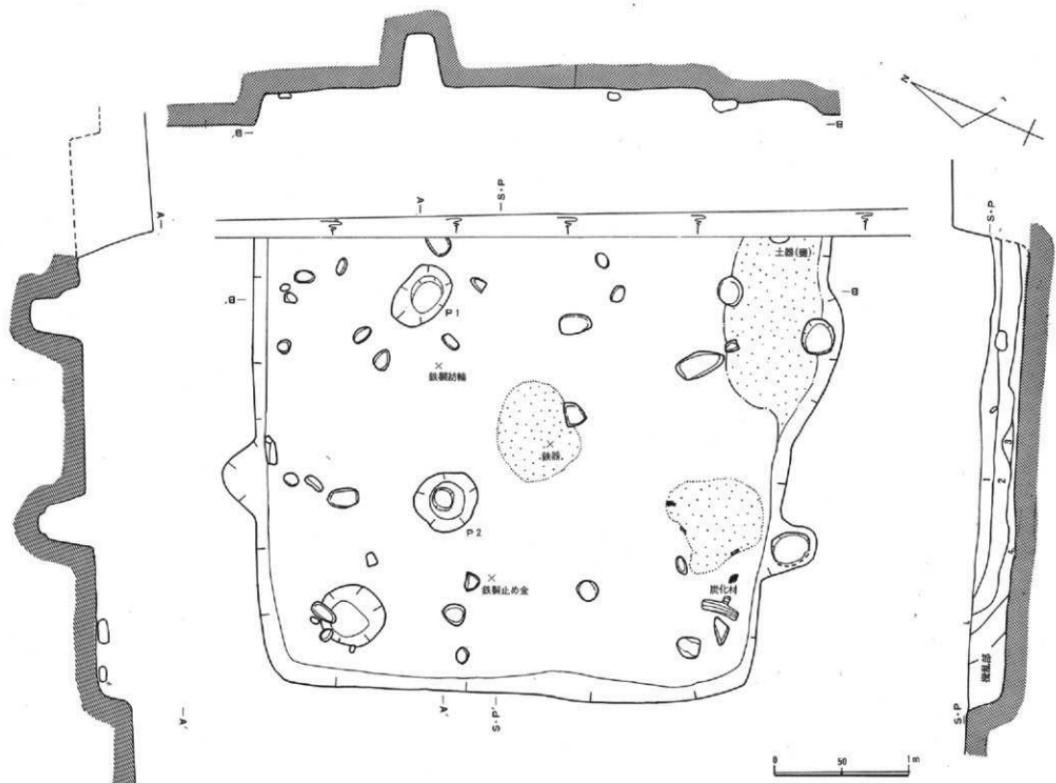
- |            |            |            |
|------------|------------|------------|
| 1. 鉄鋸      | 6. 环(内黒土師) | 11. 环(須恵系) |
| 2. 鉄器片     | 7. 环(須恵)   | 12. 塚(土師)  |
| 3. 助睡車     | 8. 环(内黒土師) |            |
| 4. 鉄釘      | 9. 环(須恵)   |            |
| 5. 环(内黒土師) | 10. 大甕(須恵) |            |



第7図 八幡原No.30遺跡第1号住居跡および遺物出土状況



第8図 八幡原N30遺跡4号住居跡実測図



第9图 八栋房No.30道路7号住宅剖面图

## 第10章 №. 40(牛森古墳) 遺跡

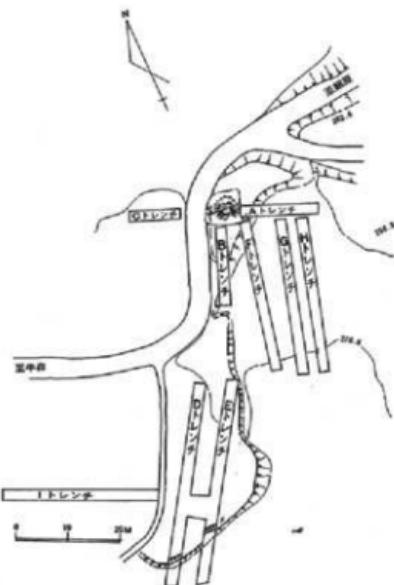
### 1 遺跡の概要

遺跡は米沢市大字牛森字細原前川原 3149 番地に所在する。付近は古墳の東側を流れる天王川(梓川)によって形成された扇状地性の氾濫原がひろがっている。その上に一段高く段丘が形成されており、古墳はその突端(海拔 265 m)に位置する。昭和 38 年 発行の『山形県遺跡地名表』の №100 該当の遺跡で、"牛森古墳"と称されている。

戰前に、当時の土地所有者が、今回調査を実施した古墳のやや北側で、藤手刀・須恵器(壺)等の遺物を得たという。その遺物は上竹井の市姫神社に寄贈されたらしいが、現在は所在不明になっている。現存する古墳は一基のみであるが、あるいは開墾前には周辺に何基かの古墳が存在した可能性も考えられる。

### 2 調査の目的と経過

昭和 50 年 5 月 1 日から、調査を開始した。実質調査日数は約 1 ヶ月である。最初の構想では 2 週間を予定していたが意外に手間どり、調査期間を延長せざるを得なかった。調査経過について、日誌から要点を選び出し、そのおおよそを述べたい。



第1図 №. 40 (牛森古墳) 遺跡全体図

#### 注

※ 昭和 49 年度に、該当地といわれている部分に、試掘溝を設けて調査を実施したが、古墳とおぼしき遺構の発見はなかった(『本報告書 第 1 集』 第 4 章)  
また、問題の藤手刀・須恵器(壺)等は、本牛森古墳の出土品であると伝える向きもある。したがって、本情報の当否は未確認である。

## &lt;調査経過&gt;

- (1) 墳丘の現状を写真撮影するため、墳丘の雑木を伐採。周辺部の清掃を行なう（5月2日）。
- (2) 古墳周辺の地形測量を実施する（5月3日—5日）。
- (3) 墳丘の表土の剥ぎ取りを開始。最初に墳丘の半分のみ掘り下げ、その結果早くも比較的良好な状態で積石を確認する（5月3日—5日）。



第2図 牛森古墳発掘風景

- (4) 一方トレンチによる墳丘の規模、周溝の有無、周辺部における遺構の発見等の調査を実施した（5月3日—10日）。
- (5) 墳丘上面の積石の全容を明らかにする。実測作業、写真撮影を実施（5月5日—10日）。
- (6) 若干墳丘を掘り下げ、主体部を確認（5月11日—12日）。
- (7) 主体部の発掘開始。蓋石の一部が玄室埋土上面まで落ち込んでおり、それを除去。埋土の掘り下げを実施（5月12日—20日）。
- (8) 玄室内の遺物の発見につとめる。銅帶金具・刀子が出土（5月25日）。
- (9) 羨道部の閉鎖状況を観察（5月25日）。
- (10) 羨道の蓋石を除去。埋土を掘り下げ遺物の発見につとめる。土器類、鉄鎌が出土（5月26日—27日）。



第3図 牛森古墳清掃風景

- (11) すべての記録を終え、調査完了（5月31日）。
- (12) 現地説明会（6月7日）。

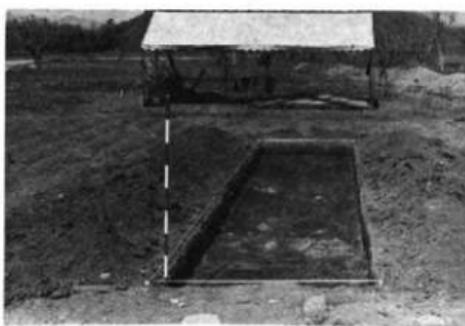
## 3 トレンチ

残存している墳丘を中心に、その外側にトレンチを設定し、築造当時の墳丘の規模を明確にすることにメイン・テーマをおき、周溝の有無・他の各種遺構・遺物の検出につとめ

た。A・B・Cの各3本のトレンチは現存する墳丘の内部主体があると推測されるあたりに設置基準方向をあわせた。Bトレンチではガラスの瓶片等が土中に包含され、耕作によって攪乱されている。Aトレンチでも同様良好な結果は得られなかつた。すなわち、周辺の痕跡はみられなかつた。

周辺に祭祀を行なつた“もがり屋”

的な遺構、その際に供用された祭祀遺物、古墳を構築する際の作業場跡等を検出するためA～Cトレンチの他にも、近辺に6本のトレンチを設定し精査したが、それらしき遺構、遺物はまったく見出されなかつた。ただ、F・Dトレンチでは一部に黒色泥土を埋土とする深い落ちこみが確認された。これは段丘の縁辺を洗つていた小川の痕跡かと考えられる。



第4図 №40遺跡とトレンチ近景

#### 4 古墳付近の土層

古墳の西方に設定したBトレンチの一部を深く掘り下げ、土層の堆積状況を調査した。それによると、次のような観察結果が得られた。

I 表土層……耕作土層であり、色調は茶褐色を呈す。

平均して20～30cm程の厚さをもつ。

II 黒色土層……植物の根・茎等が腐蝕し、形成された層で、最厚部で10cm程である。

III 茶褐色土層……色調は明茶褐色に近く、しまりのある土層で、微砂質である。層の厚さは、20～30cmである。

IV 灰緑色砂層……青味をおびた灰緑色を呈し、比較的粒子の細かい砂からなる。厚さは10～15cmである。

V 灰緑色粘質土層……青味の強い粘質土層で、酸化する事により黄色味をおびる。粘性弱く、下位層の上面までこの層がみられる。厚さは30cm位である。

VI 河川砂礫層……大小の円礫・荒砂からなる層で、

30cm	I
10cm	II
30cm	III
15cm	IV
30cm	V
∞	VI

第5図  
№40遺跡Bトレンチ付近土層状況

上部から、小礫層・大礫層・荒砂層となっている。地点により若干堆積状況が異なる。

### 5 墳丘 (第 78・79 図版)

この古墳の墳頂には、以前お地蔵様が祀られていたとのことであるが、現存していない。そのために上部は平坦になり、また脇を通る市道によって大分削平され、また封土の大部

部分が流失もしくは変形しているのが現状である。封土の高さは現在比高約 1 m しかなく、直径も 5.6 m である。<sup>38</sup> 墳丘を真上からみると、一見方形の土壇を思わせるように変形してしまっている。調査前の状況は、墳丘東側裾部付近に蓋石が露出していた。

表土の剥取りから開始し、順次積石を精査確認していく。後世になって取り除かれたものや、攪乱された部分があるが、ほぼ原状をとどめているものと思われる。注目すべき事例として積石は一定の法則性をもって積まれている。封土上面の積石はほとんどが河原石(円礫)を使用しており、わずかながら主体部に用いた凝灰岩が散見される。封土は茶褐色微砂質土である。周溝は存在しなかったことが確認された。

### 6 内部構造 (第 7・8 図、第 81 ~ 89 図版)

この古墳の主体部は、墳丘のほぼ中央に存在する石室で、構造的には横穴式であるが、もしかすると機能的に竪穴式ではなかったのかという疑いさえもたれる。羨道部の高さがあまりにも低いからである。羨道より奥壁を結んだ線、その方位は N-34°-W を指示し、羨道末端の袖石から奥壁まで約 2.25 m ある。羨道には蓋石が存在していた。玄室では一部に蓋石が残存していたのみで、ほとんどが移動していた。奥壁には凝灰岩の割り石を使用し、側壁には同じような大きさの河原石を石垣状に積みあげ構築している。

玄室の平面形は胴張りの楕円形を呈し、両側壁の線はゆるい円弧を描いている。幅は中央部で約 1.0 m であり、玄室の長軸約 3 m である。凝灰岩切石の門柱石による両袖式の石室で、石床は小さな円礫を使い、平坦に敷石として整備している。

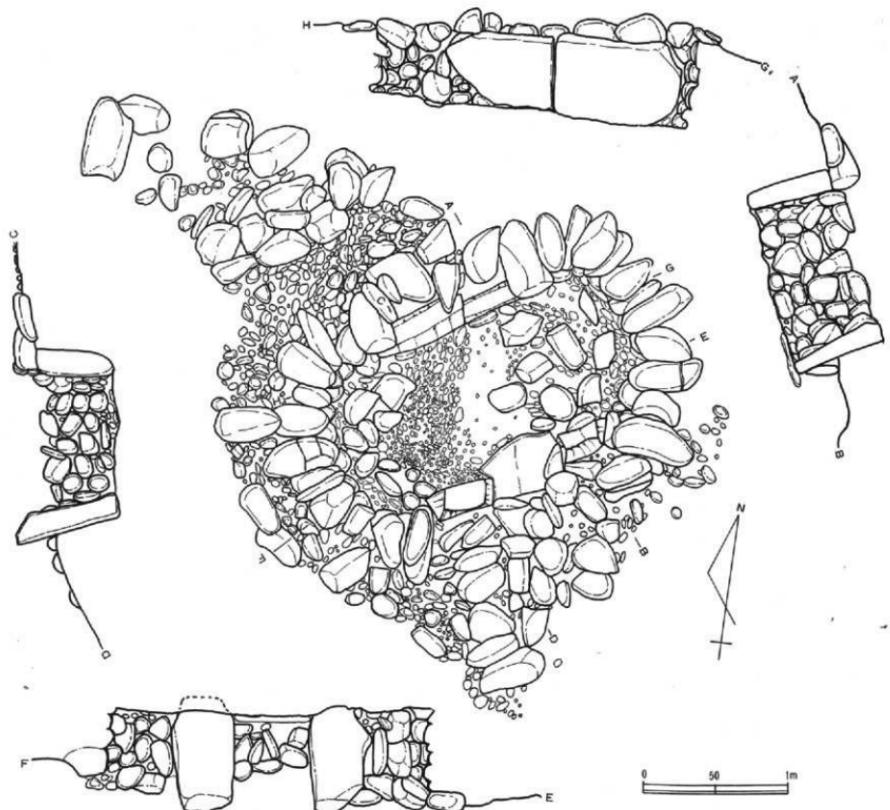
側壁は左右対象で、下方に大きな円礫を掘え上方にゆくにしたがってややせり出している持ち送り積である。玄門は 2 本の門柱石があり、門柱石の間には扁平な仕切石が置かれ



第 6 図 牛森古墳墳丘露出蓋石



第7図 八幡原No.40遺跡(牛森古墳)表道部隣壁状況



第8図 八幡原No.40遺跡(牛森古墳)主体部実測図

ている。羨道の蓋石は、門柱石の上にのっている。閉塞の際に用いられたと思われる河原石が僅かながらみられた。

主体部の外側の積み石の平面形を図面上でみると、人頭大の礎や拳大などの礎が規則的に玄室の西側に40~50cmほどの幅をもって配置されている。単にこれらの礎は石室を構築した際不要になった石材を廃棄したものとは考えられず、何らかの目的をもって積まれたものであり、構造上非常に重要な意味をもつものと推測される。なお、構築時の羨道部の高さは50~60cm、玄室の高さは1m程であったと思われる。

#### 注

\* なお龜田光明氏によれば、昭和37年ころ氏の調査時に、墳丘の直径が今よりも1m程大きかったという。

### 7 出土遺物(第90図版)

検出した遺物は第1表にしめした通りである。以下個々の遺物について簡単に説明を加える。

#### (1) トレンチ内から検出されたもの。

トレンチ内から出土した遺物としては、須恵器小片がある。Aトレンチの墳丘裾部付近で検出したもので、器種には甕・蓋・坏がある。(第90図版-3~6)

#### (2) 封土上面および封土中から検出されたもの。

第1表にもしめしたように98片の土器片が封土上面、封土中から出土している。その出土状況はいたって不規則で、推測するに数回の盗掘により遺物が封土の各所に散乱したものと考えられる。

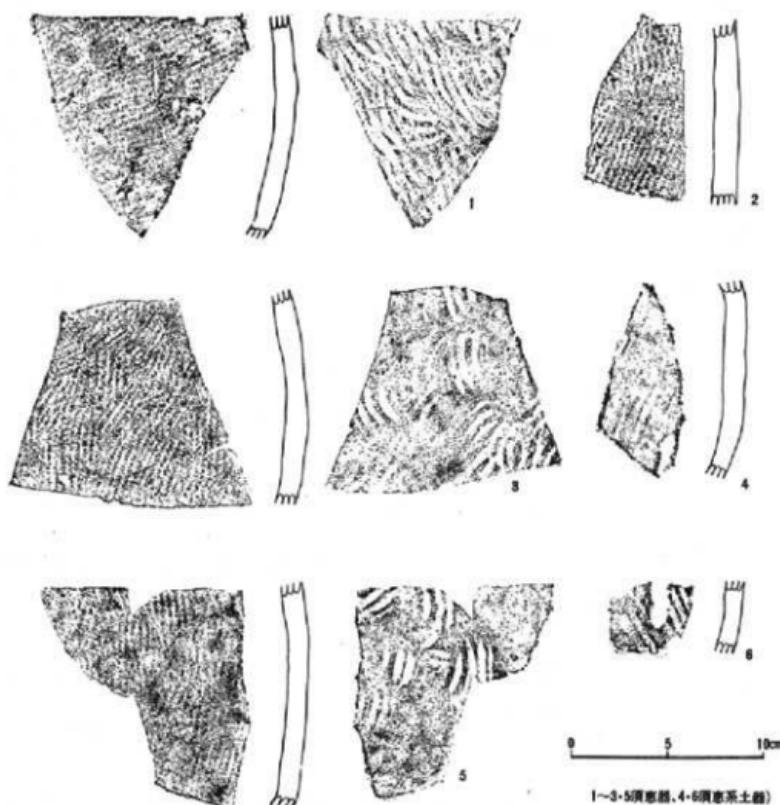
いずれも土器は破片のみで、須恵器が大部分である。器種には、甕・坏・蓋がある。3種類の器種のうち、甕が多数をしめ、その中でも同一個体のものと思われる破片が多い。坏・蓋は小片であり、その細部にわたる形状は不明である。

土師器には壺・甕がある。そのうちの1片はいわゆる須恵系土器と呼称されるものに近似した色調・焼成

第1表 八幡原№40(牛森古墳)遺跡出土遺物一覧表

封 土	須恵器(甕・坏・蓋)片 96 土師器(壺・甕)片 2
玄 室	鉢形金具(丸柄 3, 遠方 3, 鈍尾 1) 刀子(1) 須恵器片
羨 道	内黒土師器(坏)片 1 須恵器(坏)片 鉄 錆 1

を呈する。



### (3) 主体部から検出されたもの。

主体部が盗掘されており、少量の遺物が残存していたにすぎない。とくに狭道部は盗掘による破壊が大きく床部に密着していた遺物のみが残存していた。

#### ① 玄 室 内

玄室内より出土した遺物には、鉢帶金具・刀子・須恵器片がある。いずれも西よりの位置に集中して検出された。

## 銅帶(かたい)金具(第2表、第10図、第90-1図版)

出土状況は腰帯を巻いた状態で副

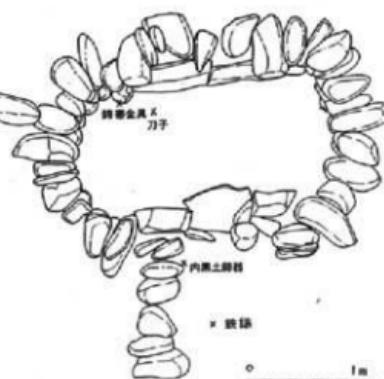
葬し、その皮革部が長年月の間に腐

打し、金具のみが残存した状態であ  
った。

内訳は、丸柄 3、巡第 3、鉈尾  
1である。鉸具は検出できなかった。

遺存状況は比較的良好であるが、な  
かには腐蝕の著しいものがある。

銅帶金具と接近して鐵製刀子が出土  
している。これは魚袋刀子として帶  
に付属していたものと考えられる。



第10図 八幡原No.40遺跡遺物出土位置

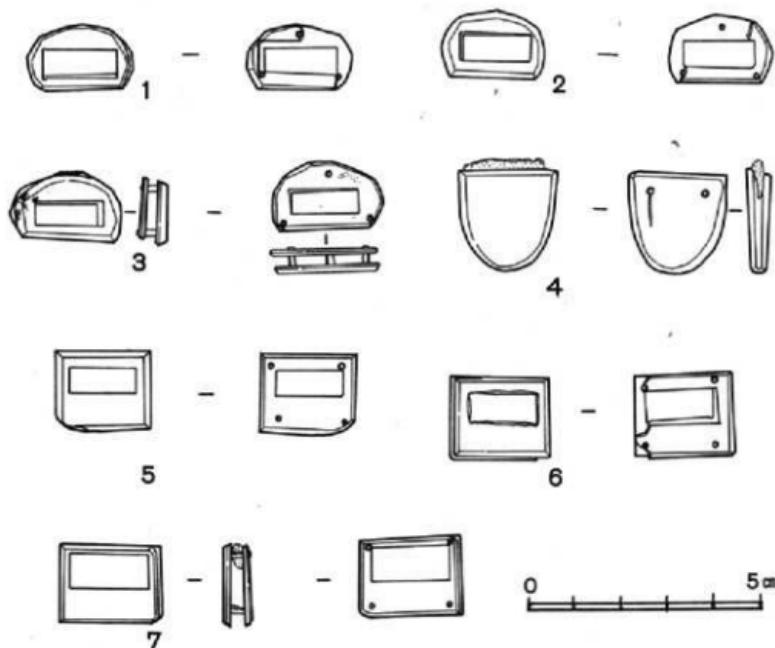
丸柄は半梢円形で3本の鉢で2枚の青銅板をつないで一つの製品に仕上げているものである(第10図1-3)。巡方は方形をなし、4本の鉢によって2枚の青銅板がつながれている(第10図5-7)。鉈尾は丸柄・巡方と同様に2枚の青銅板を2本の鉢によってつなげてある(第10図4)。僅かではあるが、これらの金具の内数個に革質が残存付着している。とくに鉈尾には比較的良好な状態で革質が残っている。丸柄・巡方・鉈尾とも綠青が浮き出しているが、保存状況の良好なものには鍍金されたと推測される痕跡が見られる。

前述したように今回の調査によって出土した銅帶金具は、丸柄 3、巡方 3、  
鉈尾 1 からなるが、正倉院御物として伝わる腰帯と比較してみると、鉸具を欠く他、丸柄、巡

方とも数量的

第2表 銅帶金具計測表

項目 名称	No.	継長	横幅	内溝継幅	内溝横幅	表板厚	裏板厚	備考
鉸具 1.巡方	1	1.1 cm	1.8 cm	0.5 cm	1.25 cm	0.15 cm	0.1 cm	裏板欠損
	2	1.1 cm	1.8 cm	0.45 cm	1.2 cm	0.15 cm	0.1 cm	"
	3	1.1 cm	1.8 cm	0.4 cm	1.2 cm	0.15 cm	0.1 cm	
4.丸柄 8.鉈尾 1からなる といわれて いる。	5	1.4 cm	1.6 cm	0.4 cm	1.15 cm	0.1 cm	0.1 cm	
	6	1.4 cm	1.6 cm	0.5 cm	1.15 cm	0.1 cm	0.1 cm	裏板一部欠損
	7	1.35 cm	1.7 cm	0.6 cm	1.35 cm	0.12 cm	0.1 cm	革質残存
鉈尾	4	1.7 cm	1.7 cm					"



第 11 図 八幡原 No. 40 遺跡（牛森古墳）銅帶金具実測図

鉄製刀子（第 11 図 - 2 , 第 90 - 8 図版）

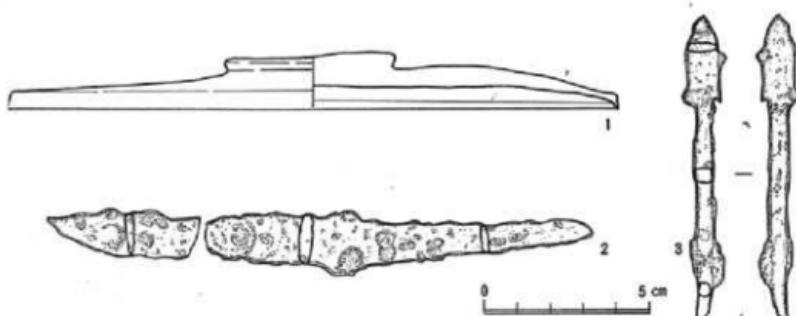
銅帶金具脇より出土した。16.5 cm, 身幅 1.6 cm で、基部の方にわずかに木質が付着している。出土状況から推察すれば、腰帯に付属する魚袋刀子であろうかと思われる。銹着きが著しい。

#### 須恵器片

玄室内埋土上層より出土したもので、甕の破片 1 点のみである。恐らく盗掘の際に、玄室内に混入したものではなかろうか。

#### ② 美道

美道より出土した遺物は、内黒土師器（壺）片、須恵器（甕）片、須恵器（蓋）、鉄鏃 1 がある。美道部は盗掘による破壊が著しく、調査途上で美門付近よりビニール袋などの混入がみられており、戦後に盗掘にあった事を歴然と物語っている。



第12図 八幡原№40遺跡出土遺物実測図

1・3 羨道部出土 2 玄室出土

#### 内黒土師器(坏)片

羨門付近より出土している。器種は坏で、茶褐色を呈し、内外面ともヘラ削り、ヘラなどが施されている。全体の5分の1程を残している。

#### 須恵器(壺)片

羨道上より出土している。厚手の壺の破片で、灰黒色を呈する。

#### 須恵器(壺)(第12図1)(第90図版-2)

羨道中央より出土したもので、復元によりほぼ完形となったが、発掘時は数個の細片に分かれていた。形状はややいびつで、端部は下に屈折している。灰黄色を呈し、胎土にはわずかながら粗砂を含んでいる。径 18.5 cm, 高さ 1.7 cm。

#### 鉄 錆(第12図3)(第90図版-7)

羨道底面より出土している。完全な形をしているが、錆着きが著しい。平根で腹抉りが浅く、基部の方に木質がわずかに付着している。全長 9.3 cm。

#### 8 構築の年代

本古墳の構築技法の上で特長的なことは、前述のように

- ① 墳丘は円墳で、本来、大きなものではなく、恐らく、僅かに石室を覆っている程度であったろうこと。
- ② 内部構造は、若干の凝灰岩の他は多くは河原石の長め(長さ 50 cm, 径 25 cm 程度)のものを、小口積みにして、玄室と羨道をもつ横穴式積石石室であること。

- ③ 玄室は長楕円形のプラン、その長径に直角方向に羨道が連接すること。
- ④ 玄室、特に羨道は、その高さが低く、被葬者の遺体の埋納は、横方からは不可能であり、上方から行なわれたのではないか、と思われること。
- などである。

このような構築方法に類似するものは、これまで東北地方において多く認められて来た。しかし、一方西辺の山口県萩市見島にも積石塚群があって、和銅開珎以下10世紀までの和銅を出した例もある。

東北地方の積石塚では、上記4項のうち、①、②、④項において相類似するものとして下記の諸例が報告されている。

猫谷地古墳群	岩手県和賀郡江釣子村猫谷地	(注1)	
五条丸古墳群	〃	上江釣子	(注2)
西根古墳群の若干	〃	金ヶ崎町西根字原添下	(注3)
長沼古墳	〃	和賀町長沼	(注4)
鳥矢崎古墳群の1号墳	官城県栗原郡栗駒町矢崎字猿飛来	(注5)	
新山古墳	福島県伊達郡梁川町細谷新山	(注6)	

ただこれらの諸例は、前掲4項目のうち③項については、玄室の長径方向に沿って羨道が連接しており、この点について合致していない。また、例示した諸古墳群の他に、岩手県内北上川沿岸地区に、南から北まで十指に近い同期の古墳群が指摘されている。<sup>(注7)</sup><sup>(注8)</sup>

上記の河原石積石室をもつ古墳群を、その所在に留意してみると地域的には、岩手県から宮城県北部にわたるものとされて来た。しかし近ごろの調査例では、福島県北部にも新山古墳(伊達郡梁川町)のごとき類例が見られるし、また、やや異なる要素をもつとはいえる、新潟県西郡に宮口古墳群(東頬城郡牧村)でも河原石積石室が調査報告されている。<sup>(注9)</sup>分布範囲はさらに拡大する可能性がある。そしてこれら古墳(群)の築造年代は大部分は古墳時代末期(終末期)と考えられて来た。本古墳のごときもその一例と見ることができようし、その構築も同じ終末期古墳と推察して誤りがないであろう。その古墳時代終末期とは、古墳造営の社会的な速度が急に衰えた7世紀以後の僅かな時期という定義にしたがっておこう。<sup>(注10)</sup>

ところで、構築年代について有力な手がかりとなるものが副葬品の中にある。本古墳で玄室内石床上から刀子とともに発見されている青銅製の鎧帶金具である。

伊藤玄三氏は、東北地方における鉢形金具出土地名を、1965年12月の時点で9例をあげておられるが、その例にならって、本古墳をも含めて若干補足してみる。

第3表 東北地方における鉢形金具出土地名表（1-9：伊藤玄三 1965, 10-11：柏倉亮吉補足）

	出 土 地	数 量	伴 出 遺 物	遺 跡	古 墓 内 部 構 造	備 考
1	岩手県花巻市熊堂古墳	鉢形 巡方 1 1	不 明	円墳？	河原石積 石室？	小笠原述宮報告 (考収 14の7)
2	岩手県胆沢郡金ヶ崎町 西根経街道南 15	巡方 4 丸柄 8 鉢尾 1	和同開珎 1, 刀子 1.	方墳	小礫敷？	大正 12年記録参 照の上筆者考定
3	岩手県胆沢郡金ヶ崎町 西横下釜 13 の 2	鉢形 巡方 1 4 丸柄 4 鉢尾 1	鉄刀及び装具 1 口分 刀子 2	方墳？	小礫敷	同 上
4	秋田県秋田市高清水 秋田城跡	丸柄 2	不 明	城跡		秋田城跡収蔵庫 昭和 40 年実測
5	宮城県志田郡松山町 亀井団横穴第 8 号墳	巡方 2 丸柄 3	土師器須恵器計 44	横穴	棺座あり	氏家と典報告 (『日本考古学の 諸問題』所収)
6	宮城県宮城郡多賀城町 多賀城内城跡	丸柄 1		城跡		昭和 38 年 8 月 調査
7	山形県東置賜郡赤湯町 二色根第 2 号墳	鉢尾 1 巡方 3 ?	和同開珎 2, 銅環 2, 銅環 1, 鉄刀及 C 装具 2 口分。 刀子 6, 鉄 級多數 須恵 器 2, 土師器 5.	円墳？	横穴式石室	西村真次報告 (『面開盆地の 古代文化』)
8	山形県東置賜郡梨郷村 下巻海塚山古墳	巡方 2 丸柄 2	蘇手刀 3, 須恵器 4.	円墳?	石室?	同 上
9	山形県東置賜郡梨郷村 下巻中島平某地点	丸柄 1 ?	不 明	円墳?	石室?	柏倉亮吉報告 (『山形県の 古墳』)
10	宮城県栗原郡栗駒町 鳥矢崎第 2 号墳	鉢形 巡方 1 6 丸柄 1 2	鉄製刀子 土師器 蘇手刀 須恵器	円墳	組合せ木棺	高橋富雄ら報告 (『鳥矢崎古墳 調査概報』)
11	山形県米沢市牛森細原 牛森古墳	巡方 3 丸柄 3 鉢尾 1	鉄製刀子 内裏土師器 須恵器	円墳?	河原石 積石室	昭和 50 年 八幡原調査記録

この 11 例のうち、本県のものを除けば、下表の通りで、ともに置賜平野の周辺部山麓にある古墳である。

第 4 表 山形県内における銅帶金具出土地名表（伊藤玄三作製の表により補足）

出 土 地	數 量	伴 出 遺 物	遺 跡	古 墳 内 部 構 造	備 考
南陽市二色根南原 二色根第 2 号墳	鉈尾 1 巡方 3 ?	和銅鏡 2 銀環 2 銀環 1, 鉄刀及工具 2 口分, 刀 子 6 鉄, 多款 須恵器 2, 土師器 5.	円墳?	横穴式石室	西村真次報告 〔置賜盆地の 古代文化〕
南陽市梨郷下巻 神楽山古墳	巡方 丸輪 2	蘇手刀 3, 須恵器 4.	円墳?	石室?	同 上
南陽市梨郷下巻 中島平某地点	丸輪 1 ?	不 明	円墳?	石室	柏倉亮吉報告 〔山形県の 古墳〕
米沢市牛森細原牛森古墳	巡方 丸輪 3 鉈尾 1	鉄製刀子 内黒土師器 須恵器	円墳?	河原石積石室	

さて、銅帶金具は、改めていうまでもなく、革帶に付けられた飾金具で、極めて簡素な青銅質の鋳造品である。この革帶の法的な規制について、伊藤玄三氏の考証（注 11）によると、慶雲 4 年（707）に、初めて革帶の使用が認められており、即ち、銅帶の出現を示すものと考えられる。和銅 5 年（712）の格では、位階に従って銅帶に差を定めた。その後、延暦 15 年（796）に、銅帶の制は禁止されたが、大同 2 年（807）から弘仁元年（810）までの 4 年間は、再び令制に復したことがあった。結局、平安初期の 4 年間は一時的な再使用期があったものの、それを除けば、銅帶の行なわれた時期は、707 年から 796 年までの時期、それは主として奈良時代中心であった、ということになる。

この事を踏まえていえば、銅帶金具出土の古墳は、一応、8 世紀の構築と考えてよいことになる。本古墳にあっても、この推定は例外ではあるまい。石室の構造による推定と併せて考えるべきであろう。

## 9 ま と め

- (1) 米沢市八幡原 No. 40 (牛森古墳) 遺跡では、ほぼ完全な古墳時代末期（奈良時代）の胴張りの T 字形石室を検出した。形態的には横穴式であるが、機能的には竪穴式であるかもしれない。このようなかつ形態的には、横穴式、機能的には竪穴式の石室は現在までの知見では、岩手県の猪谷地古墳群・五条丸古墳群・宮城県鳥矢崎古墳群など

どに類例を見る。石室の構築法および出土遺物(鈎帯金具等)からみて、造営年代は8世紀と考えられる。

- (2) 主体部は材質として、近辺の山に多くみられる凝灰岩(山石)と、河川の運搬作用によって円くなった円礫(河原石)を組み合わせて構築している。比率的には河原石が凝灰岩よりも数多く用いられている。おそらく円礫は古墳の東側を流れる天王川の河原石を用いたものと推測される。
- (3) 玄室内底面より出土した遺物、特に鈎帯金具は、これだけまとまって出土したのは山形県内でははじめてであり、当時の服飾等を知る上で貴重なものである。

#### (付記)

鈎帯金具は、いうまでもなく古代における律令官人の身分を誇示するために用いられたものである。しかし和銅5(712)年の格によると、その官人であっても、鈎帯の使用には、位階によって差があった。すなわち、6位以下の者は白銅や銀装の使用を禁じられていたのである。その詳しい規定は斎老令によって知られるが、それによると、5位以上は金銀装、6位以下は烏油(くろつくり)、即ち銅質黒漆塗の跨を用いることになっていたのである。本古墳出土の鈎帯金具は、6位以下の官人に使用を認められたものである。

6位以下の官人といえば、上国であった出羽国の官人では、国司の守(從5位下)だけが例外で、それ以下の介(すけ)、(じょう)、目(さかん)らや、時には郡司らが、本古墳出土の鈎帯金具の帯用資格者だといえる。

八幡原№30.31遺跡で確認された住居跡の中には、奈良時代にさかのぼる可能性のあるものがあり、そのような集落跡との関連性も当古墳を研究・考察するうえで重要な要素となってくる。

#### 付記

本報告の印刷中に、阿部義平氏による下記の論文を見ることが出来た。

阿部義平「鈎帯と官位制について」昭和51.10(東北考古学の諸問題所収)

この論文において、氏は、鈎帯の年代について、文献の分析により、鈎帯の使用が

- ① 707~796年(慶雲4~延暦15年)
- ② 807~810年(大同2~弘仁元年)

の二期に限定されると論じている。

なお、本古墳出土の鈎帯についても同論文の付記に引用紹介されている。

#### 注

1. 『猪谷地古墳発掘調査報告』田中喜多見・滝口 宏ら(岩手史学研究 第9号)昭26
2. 『五条丸古墳群』伊東信雄・板橋 源(岩手県文化財調査報告書 第11集)昭38
3. 『西根古墳と住居址』伊東信雄・伊藤玄三・草間俊一(金ヶ崎町文化財報告書)昭43
4. 『長沼古墳』草間俊一・玉川一郎(和賀町文化財報告書)昭49
5. 『宮城県鳥矢崎古墳調査概報』高橋富雄・加藤 孝・金野 正(栗駒印埋蔵文化財報告)昭47
6. 『新山古墳群』梅宮 茂・八巻一夫ら(梁川町文化財報告書第1)昭50

7. 玄室の長軸（径）に対して直角方向に狭道が連接する例 — いい換えると、玄室の平面形が長さより幅が広いという例は、必ずしも多くはない。これまでのところ、後掲のように、長崎・兵庫・和歌山・京都・石川など、主として西日本の諸府県で注意されて来ているが、それらは本古墳のような構築法ではないし、その築造年代も 6 世紀前半・7 世紀などと推定されている。本古墳との結び付きは薄くはない。

(例)

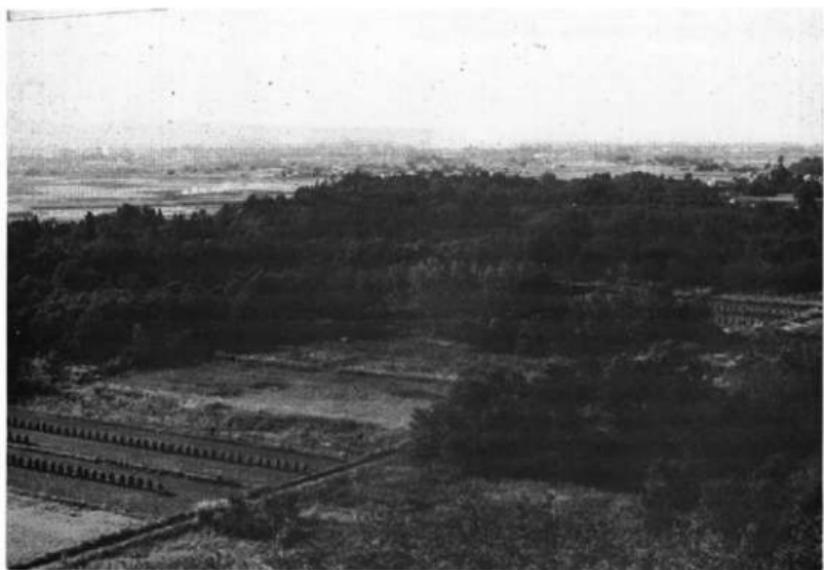
- 長崎県対馬小茂田矢立山 2 号墳 (推定年代 7 世紀)  
 福岡市駄ヶ原古墳群 C 区 5 号墳 (〃 7 世紀)  
 兵庫県姫路市飾東 1 号墳  
 和歌山市岩橋千塚前山 B 134 号墳 (推定年代 6 世紀前半)  
 寺内 18 号墳 (〃 " )  
 和歌山市袖見雨ガ谷 2 号墳 (〃 " )  
 和歌山県百合山 1・2 号墳 (〃 " )  
 京都市陽枝古墳  
 石川県七尾市蛭 古墳 (〃 7 世紀初頭)

8. 『五条丸古墳群』(前掲)  
 9. 『宮口古墳群』 関 雅之ら(宮口古墳群発掘調査報告) 昭 51  
 10. 『論集“終末期古墳”』 森 浩一 編 昭 48  
 『古墳と古代文化』 森 浩一  
 11. 『末期古墳の年代について』 伊藤玄三(古代学 14-304) 昭 43

## その他の主要参考文献

1. 『薙手刀』 石井昌国、雄山閣 昭 41  
 2. 『横穴式古墳の研究』 尾崎喜左雄、吉川弘文館 昭 41  
 3. 『清水前古墳群発掘調査概報』山形県教育委員会  
 (山形県埋蔵文化財調査報告書第 3 集) 昭 49

# 図 版



▲ 1 遺跡遠景



▲ 2 発掘状況 No.24 B～F 拡長トレンチ



▲ 1 発掘状況 No.24 第2号住居付近



▲ 2 発掘状況 第III区 3号住居



▲ 1 地電探知器で査す自衛隊員



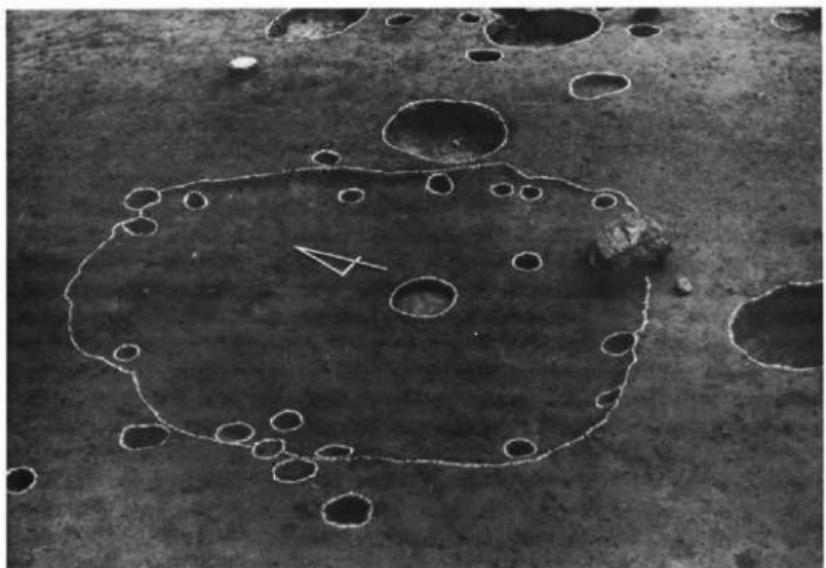
▲ 2 一時立入禁止となった現場



▲ 1 砲弾を取り上げる自衛隊員



▲ 2 掘り出された砲弾



▲ 1 No.24 第2号住居



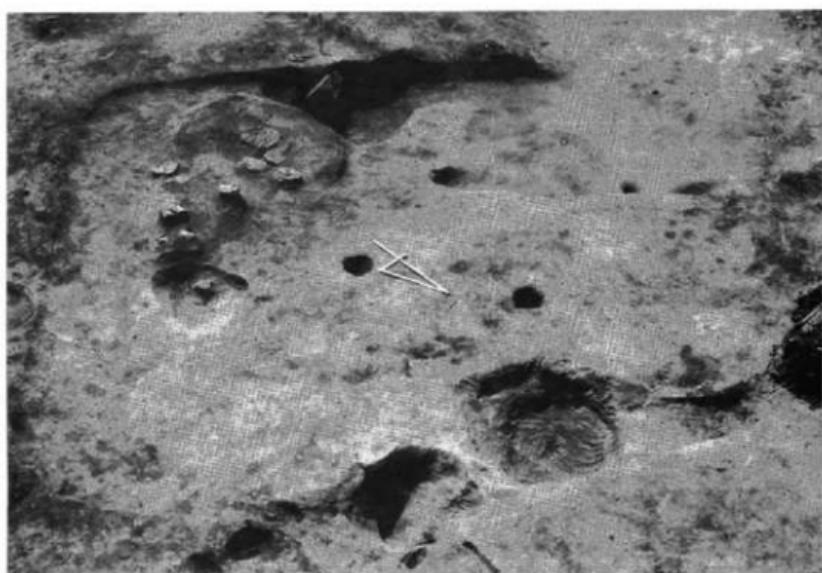
▲ 2 第Ⅲ区 2号住居



▲ 1 第Ⅲ区 2号住居複式炉



▲ 2 同理設土器



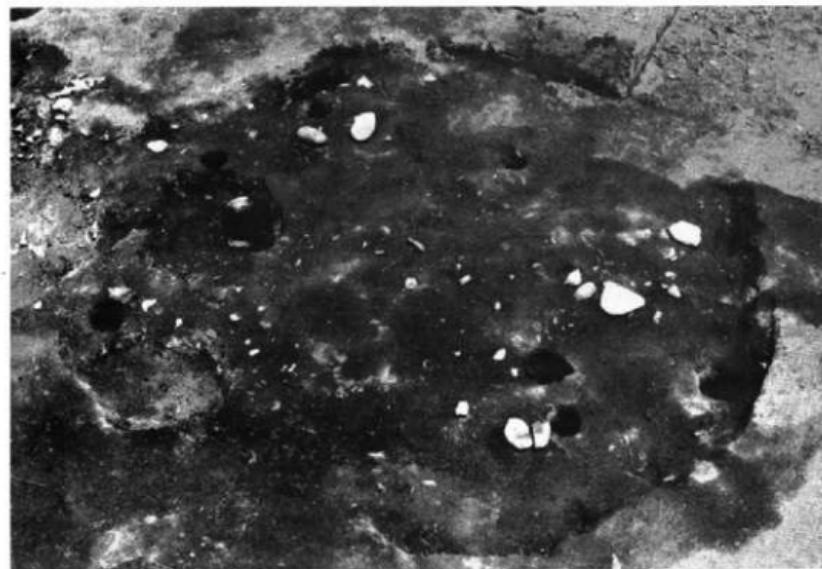
▲ 1 No.24 第1号住居



▲ 2 同上全景



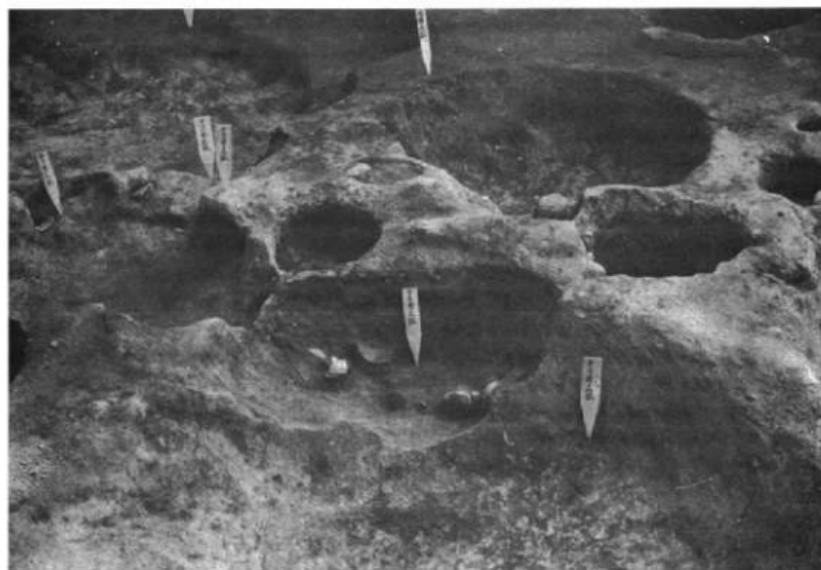
▲ 1 第Ⅲ区3号住居



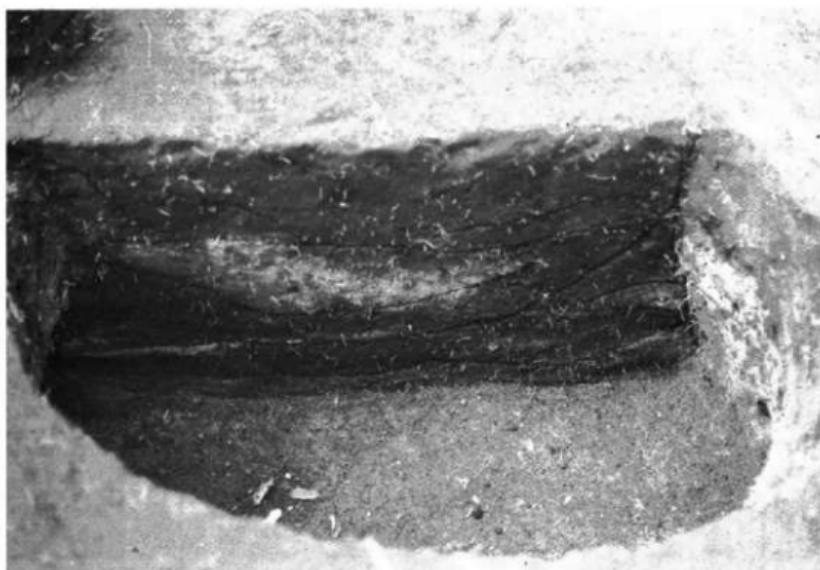
▲ 2 第Ⅲ区3号住居内カマド



▲ 1 第Ⅲ区 1号住居



▲ 2 同住居内土壤群



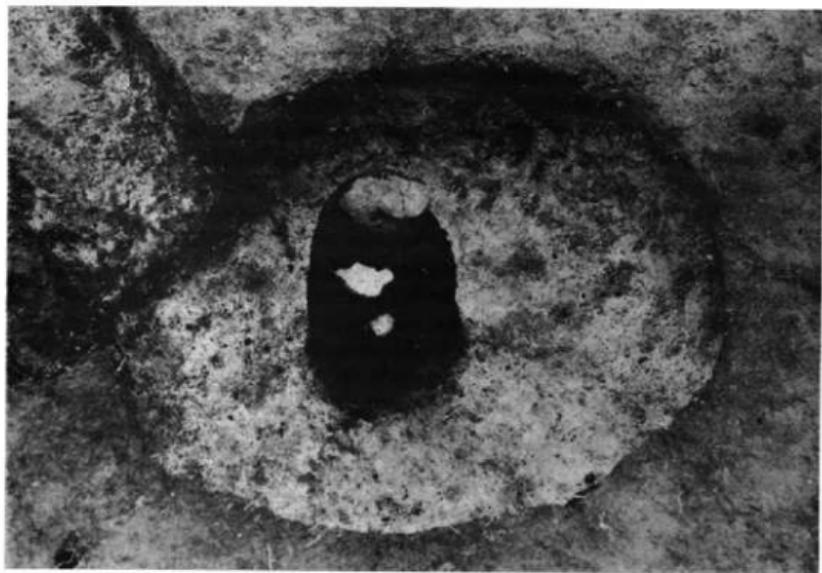
▲ 1 No.24 第48号土壤断面



▲ 2 No.24 第48号土壤完掘状況



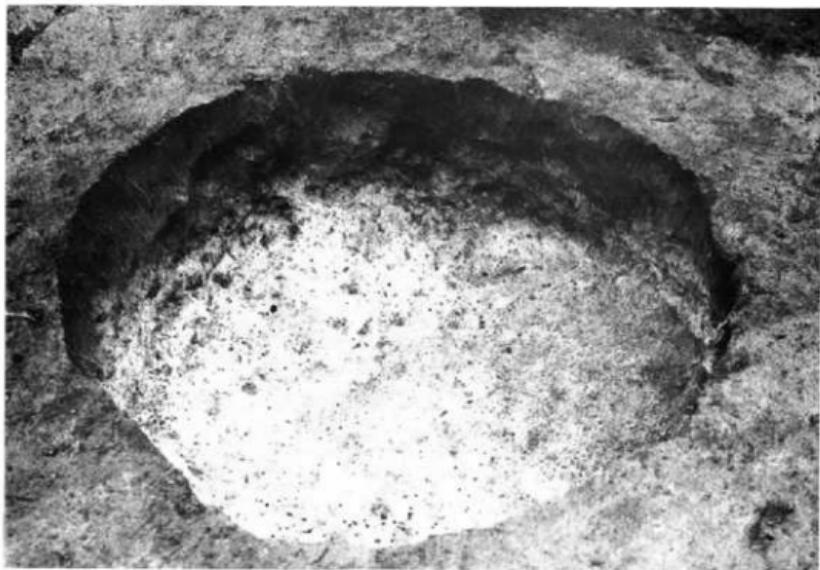
▲ 1 No. 24 第 49 号土塚断面



▲ 2 No. 24 第 49 号土塚完掘状況



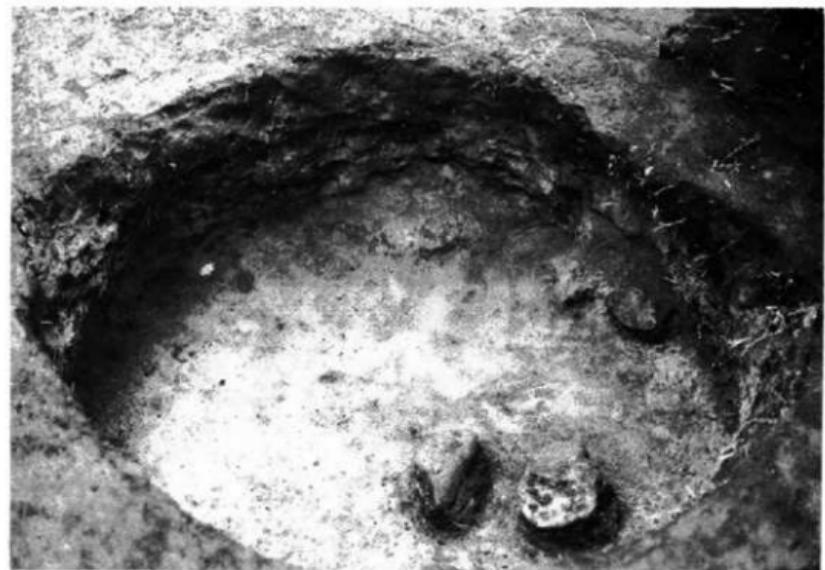
▲ 1 No. 24 第50号土壤断面



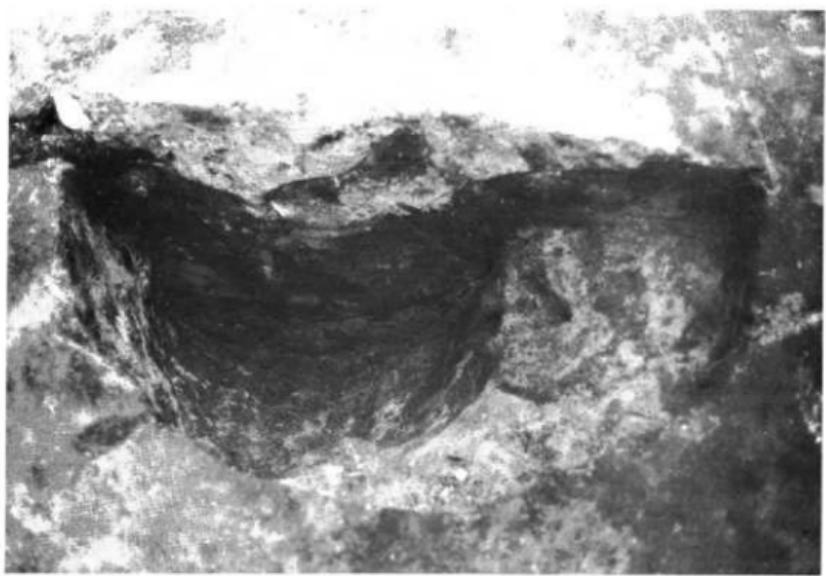
▲ 2 No. 24 第50号土壤完掘状況



▲ 1 第Ⅲ区 25号土壤断面



▲ 2 第Ⅲ区 25号土壤完状状況



▲ 1 第Ⅲ区 18号土壤断面



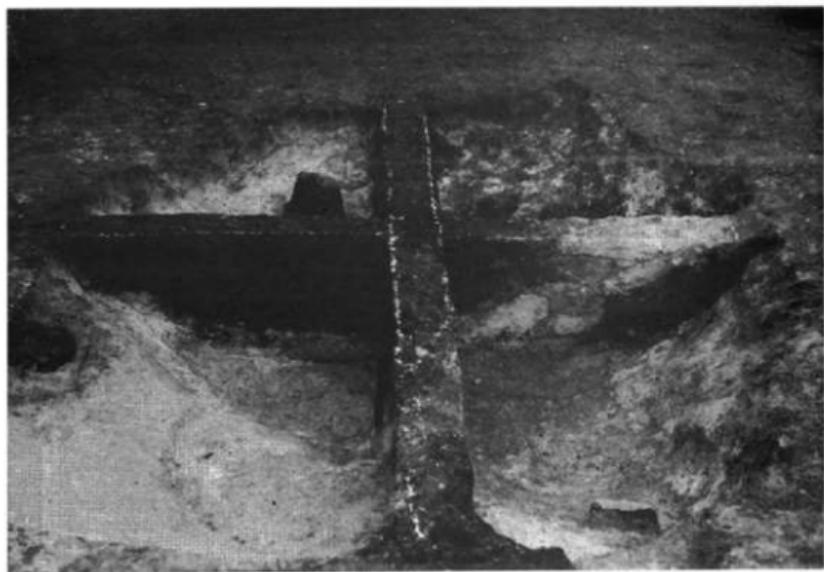
▲ 2 第Ⅲ区 18号土壤完掘状況



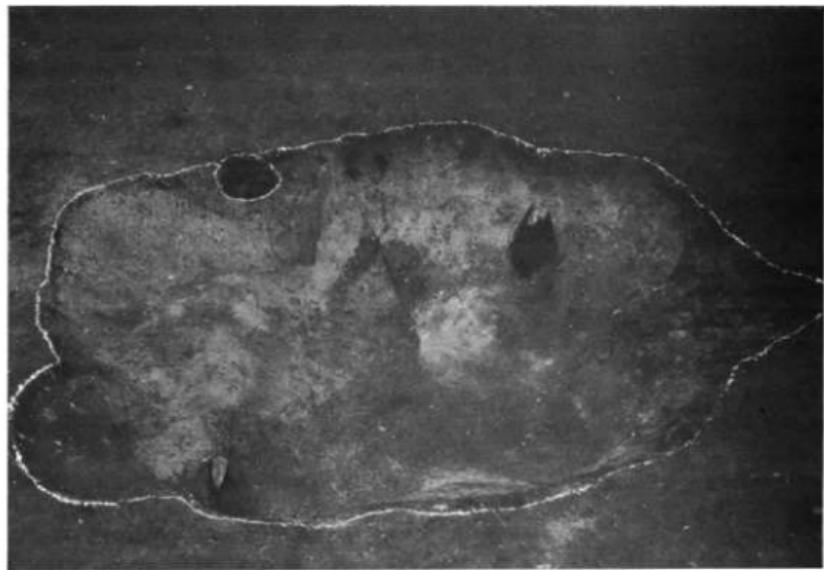
▲ 1 第II区 57号土壤確認状況



▲ 2 第II区 57号土壤発掘前状況



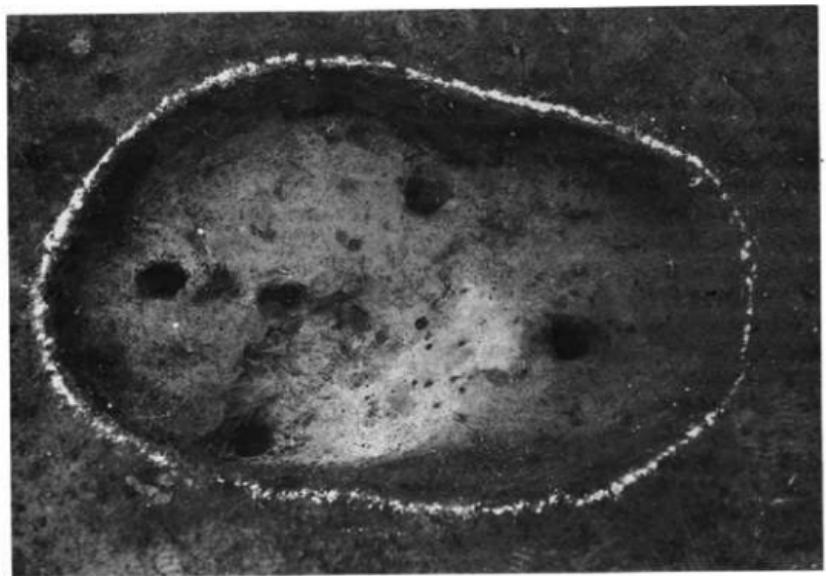
▲ 1 第II区 57号土壤断面



▲ 2 第II区 57号土壤完掘状況



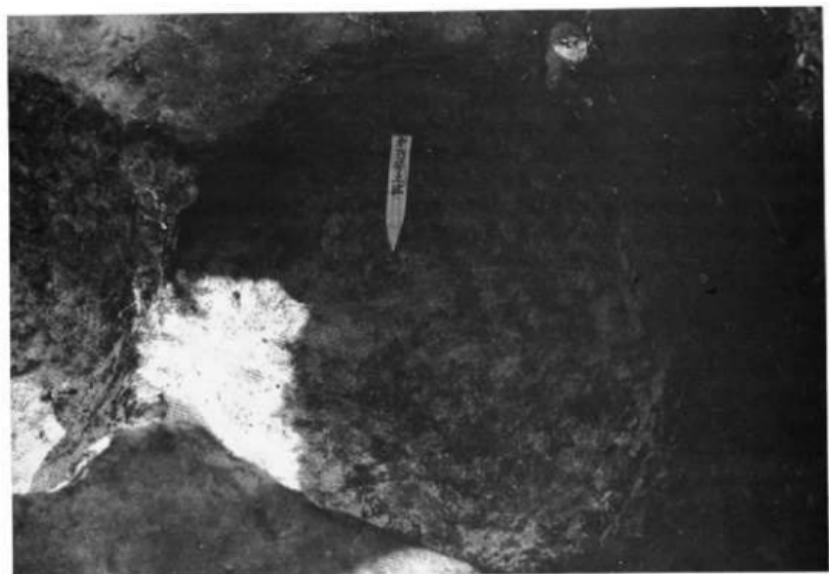
▲ 1 第Ⅱ区 58号土壤遺物出土状況



▲ 2 第Ⅱ区 58号土壤完掘状況



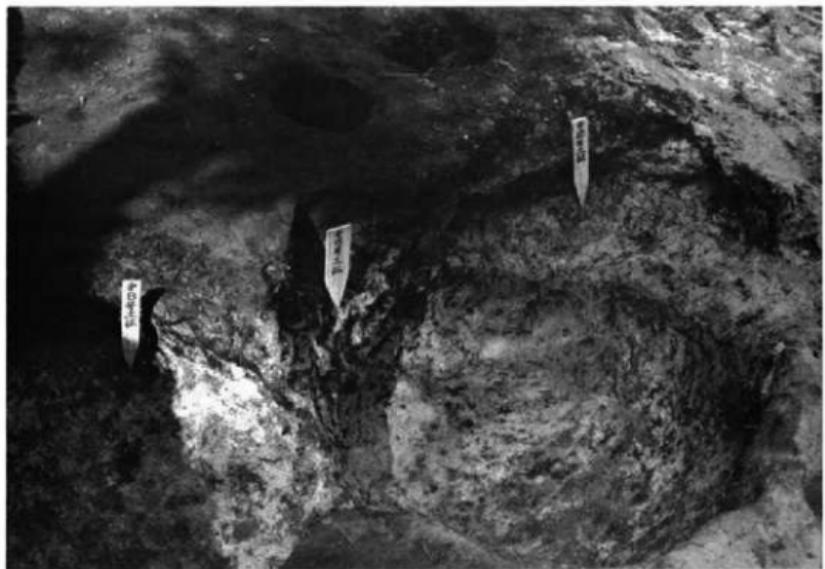
▲ 1 第III区 13号土壤断面



▲ 2 第III区 13号土壤完掘状況



1 第Ⅲ区 15号土壤断面



2 第Ⅲ区 15号土壤完掘状況



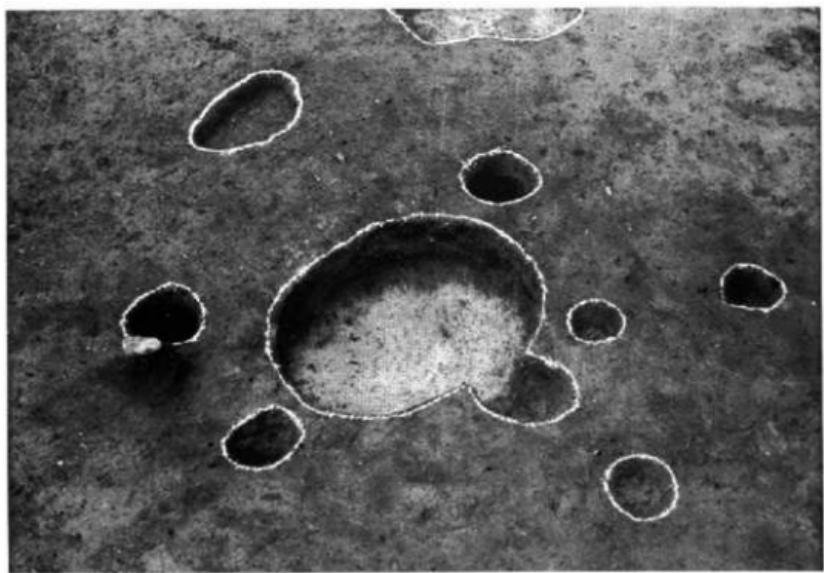
▲ 1 第Ⅲ区土壤確認状況



▲ 2 第Ⅲ区土壙完掘状況



▲ 1 第Ⅲ区第1号横穴・完掘状況



▲ 2 No.24 第38号土壤ピット群